

ミツバチとの対話、人との対話

大石 高典・小林 舞・細貝 瑞季・木村 元則・桜庭 俊太

■ 参加者

大石 高典：1978 年静岡県生まれ。生態人類学／アフリカ地域研究を専攻。環境問題への関心から森林生態学を志すも、学部時代に関わった山村問題との関わりから人類学を学ぶ。2002 年より中部アフリカのカメルーンの熱帯雨林地域に通う。京都大学農学部、大学院理学研究科、アフリカ地域研究資料センター研究員、総合地球環境学研究所プロジェクト研究員等を経て、現在、東京外国語大学特任講師。京都大学地域研究博士。主な著書に『森棲みの社会誌』（共著、京都大学学術出版会）ほかがある。

小林 舞：1983 年福井県生まれ。食と農に関心を持ち、京都市周辺やブータン王国をフィールドに、新規就農者や有機農業を切り口に小規模農業の現代的展開について研究している。米国 Smith College を卒業後、中米ニカラグアでの NGO 勤務等を経て、現在、京都大学大学院地球環境学舎景観生態保全論分野・博士後期課程に在学中。京都大学地球環境学修士。主な論文に "Transition of Agriculture towards Organic Farming in Bhutan" *Himalayan Study Monographs* 16: 66-72. (共著) などがある。

扇 米稔：1946 年長崎県対馬市生まれ。豊玉町在住。自衛隊勤務を経て対馬に戻り、電気工事会社勤務を経て独立。電気工事店を経営するかたわら、農業、林業、漁業、趣味の養蜂を实践する「現代の百姓」。島外の研究者と交流しつつ、ニホンミツバチの養蜂技術を改良、重箱式巣箱による養蜂技術を確立。養蜂名人として著名で、日本国内はもちろん、アジア諸国からの訪問者や問い合わせがある。聞き書きに『森の名人ものがたり』（共著述、アサヒビール）がある。

細貝 瑞季：1987 年群馬県生まれ。国内外でフィールドワークを行う中、対馬の伝統的養蜂をきっかけに、2012 年夏、対馬を初訪問。2013 年 4 月より対馬市島おこし協働隊員として、北部対馬を中心に活動を展開。対馬で引き継がれてきたものを後世に引き継ぐ仕組みを作るために、教育面でのアプローチを行う。また、対馬の等身大の島暮らしについて発信する冊子なども作成。来春、対馬の伝統的な発酵食品である「せんだんご」に関する小冊子の発行を予定。

木村 元則：1992 年愛知県生まれ。景観生態学を専攻。健全な都市生態系の保全、創出を目的に、学部時代は都市における樹木と送粉昆虫の相互作用（送粉系）の研究を行う。大学院は、より幅広い視野で都市生態系の評価をすすめるため造園学分野に転向。2015 年、京都市花脊において養蜂活動に参加。名古屋大学農学部を経て、現在、京都大学農学研究科・環境デザイン学研究室・修士課程。

桜庭 俊太：1993 年愛知県蒲都市生まれ。学部時代に受講した授業がきっかけとなり、地域づくりの道へ進む。2014 年より対馬市の外部集落支援員として勤務。「産業」分野を担当し、島内各所で農林水産業関係者からの聞き取り調査を実施。静岡大学農学部環境森林科学科在籍（3 年次まで修了）。

■ はじめに

ミツバチは、周囲数キロメートルの景観の変化とともに、温暖化など全球レベルの気候変化に対しても敏感に反応し、生活様式に反映する生物のひとつである。日本には、固有種ニホンミツバチが分布しているが、明治期にセイヨウミツバチが導入されたため、ほとんどの地域で両種は混在¹している。対馬は、日本で唯一、例外的にニホンミツバチのみが棲息する島として知られており、ニホンミツバチの伝統的な養蜂が連綿と受け継がれてきた。

対馬の環境変化は、ニホンミツバチとの関わりを通じて養蜂家によってどのように認識されているか。対

話の相手となることを引き受けてくださった扇米稔氏は、島外の研究者との交流を行ないながら、島に伝わる伝統養蜂を改良して重箱式巣箱を考案された経験を有する。扇氏の重箱式巣箱は、気候変化や蜜源植物の減少、外来天敵など、ハチが置かれた様々なレベルの課題に対応できる柔軟な道具であるという。扇氏とニホンミツバチの関わりに研究者をはじめとする外部のアクターはどのように関わってきたのか。

扇氏はまた、産業養蜂ではない「趣味の養蜂」を提唱され、島内に数多くのアマチュア養蜂家を育ててこられた。趣味の養蜂である以上、養蜂家は他の活動によって生計を立てることとなる。対馬の養蜂については既にいくつかの報告がなされている（たとえば、山口、1998；吉田、2000：76-80 など²）が、養蜂と、養蜂以外の生業との関連についての言及は少ない。対馬は、島嶼という地理的な制限がありながら、多様な景観を擁する地域環境で、集約的な一次産業が困難な条件にある。そのような条件下で、例えば、文化人類学などの分野では「生業複合」といった専門用語で表現されてきた農・林・漁・狩猟採集といった生業どうしの循環、つながりの知恵を、これからの未来社会を構想するうえで、どのようにデザインしていけるのか³。そのために、島（地域）の外部から地球環境学は（具体的には研究者やメディエーター）はどのように関わり、貢献することが可能なのか、といった問題意識を持って座談会に臨んだ。

本座談会は、京都大学大学院で地球環境学を学ぶ小林の一年後輩である細貝が対馬に島おこし協働隊員として入っており、レジデント研究者として活動を行なっていることが一つの契機となっている。地球環境学について、異なる背景、キャリア、専門分野、文脈で関わっている若手研究者、専門家の間で、社会と関わるうえで問題の見え方がどのように同じで、どう違っているのかを掘り起こすことも目的の1つとした。この意味で、研究と地域づくりの両方の世界を経験している細貝、仕事として地球環境学の研究に関わっている大石、大学院生として地球環境学や農学を学んでいる小林と木村、対馬に居住経験を持ちながら対馬をフィールドとした研究を志している桜庭という、世代、ジェンダー、キャリアパスにおいて、それぞれ異なる段階にある参加者を得たことは幸いであった。

京都からのメンバーは、座談会を行なうにあたって二回対馬を訪問した。まず、2015年9月16-18日にかけて本稿で紹介する座談会を行なうとともに関連する地域（上対馬：佐護地区、下対馬：内山地区、図1を参照）の自然資源利用について視察と聞き取り調査を行なった（大石・小林・木村）。

次に、2015年12月22-25日にかけて座談会のテープ起こし原稿を整理したものを持参して、理解があいまいだった点について確認するとともに、得られた成果について検討する機会を持った（大石・小林・細貝・桜庭）。また、座談会に参加したメンバー間で、幾度かにわたってフェイスブック等のソーシャルネットワークサービスを用いて、座談会での対話内容を振り返っての議論を行なった。

したがって、本章の構成も、対馬で扇氏を囲んで行った対話と、その内容を受けておこなった振り返りの対話の二部構成とし、それぞれに要約を兼ねたまとめと短い考察を付した。

- 1 都市域では、ニホンミツバチの方が優勢であり、農村地域ではセイヨウミツバチの方が優勢であるという報告がある（松浦誠．(2003).「都市における社会性ハチ類の生態と防除 (2) ミツバチ類の発生状況・セイヨウミツバチからニホンミツバチへの交代,そしてオオミツバチまでも」『ミツバチ科学』24(3): 97-109.)。
- 2 たとえば、山口裕文．(1998). 照葉樹林文化の一要素としてのニホンミツバチの養蜂 -- 対馬のハチドウとハチドウガミを事例として．『ミツバチ科学』19(3), 129-136.；吉田忠晴．(2000).「日本各地での伝統的飼育法と採蜜：長崎県・対馬」．『ニホンミツバチの飼育法と生態』玉川大学出版部．pp. 76-80. など。
- 3 伝統的な知恵や工夫を見直すことによる発見や課題解決の方向性を論じたものとして、“retro innovation”（レトロな革新）と言った概念がある（例えば、Stuiver, M. (2006). Highlighting the Retro Side of Innovation and its Potential for Regime Change in Agriculture, In: Marsden, T. & Murdoch, J. (eds.) *Between the Local and the Global* (Research in Rural Sociology and Development, Volume 12) Emerald Group Publishing Limited, pp.147 - 173. など）。

■ 対話の記録

対話Ⅰ 対馬の人・ハチ・自然環境の変遷

大石：こんにちは。京都の総合地球環境学研究所と言うところから来ました。今日は、対馬の養蜂と環境についてお話を伺わせてください。

扇：私はもう、対馬弁でしゃべるけん。

小林：そっちのほうがいいです。

I-1. 蜂蜜で太る！

大石：地球温暖化と言われますが、対馬はだんだん気候はあったかくなってきているという実感はありますか？本土だと雪がだんだん無くなってきているとか、そういうことが言われますけど。

扇：子供のころと比べたらですね、そうなんですよ。田んぼのなかで水が張ってね。子供のころ、歩いても水が割れんちゅう、そんな水は張らんですね。今。だから、どうやろ。あったかいじゃないかな。おれが風邪ひかんもんね。痩せた体になって10何年、それなら言えるけど。

小林：蜂蜜を食べてるからですか？

扇：蜂蜜、食べたら、(夫人の方を見て) あげんなる(太る)とよ。おれは蜂蜜はあんまりや。

小林：ああ、そうなんですか？

扇夫人：全然、お父さん、食べんし、なめんし、私だけ、1人占め。

細貝：いいですね。

小林：幸せ。

扇夫人：私痩せとったんですよ、ものすごく、私。

細貝：今も全然。

扇夫人：腕が、足がこのくらいしかなかった。それがねえ。結婚してからこんなに。

小林：蜂蜜の、幸せ。

細貝：幸せってことですよ。

扇夫人：ってことやろね。

扇：対馬に来たら2キロは太って帰らにや来た甲斐がない。

小林：大丈夫です。ちゃんと太ってます。

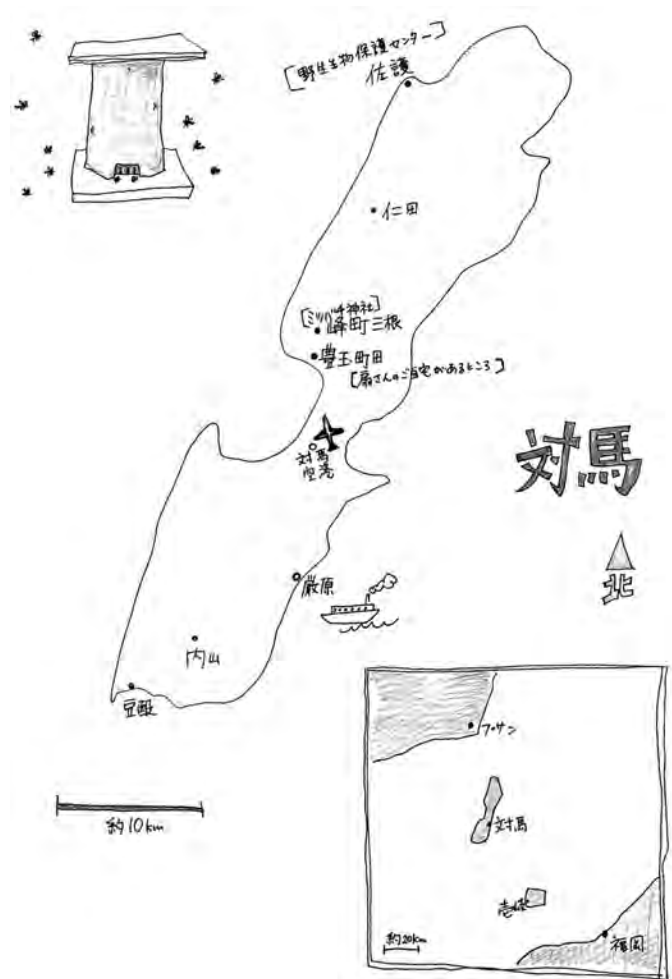


図1 対馬と周辺地域—座談会に出てくるおもな地名のおおよその位置— (作図：小林舞)

I-2. 蜂蜜の食べかた

大石：蜂蜜はもう直接なめる以外に、なんかお料理に使ったりとかそういうことないですか？

扇夫人：私、お料理には使いませんよ。店の、美味しくない蜂蜜もらったのは料理に使うけど。



図2 扇さん宅での座談会風景

大石：そのまま食べるのが基本ということでしょうか。

細貝：蜜餅。郷土料理と言えば、白いお餅に蜂蜜だけからめて食べる食べ方が確かです。

大石：対馬は蜂蜜酒とかってというのは作るって文化はありますか？

扇：何？

大石：お酒。水をね。混ぜておくと、こう、勝手に発酵して、お酒になる。

扇：それはないけど、お酒に蜂蜜入れて、焼酎に、蜜焼酎とか、これはですね、（平成）19年とか20年とかに、対馬の酒造会社がやったんですよ。これも県の補助金がありましてね。

小林：でも、それ続かなかったんですか？

扇：蜜焼酎ちゅうのを作って販売した。今、蜜が手に入らんからしよらんと思うけど。私もずっとやっばり、蜜焼酎ちゅうのは焼酎に混ぜて作って、売るじゃなくて、好きな人につくって出してあげたりしたことはある。自分で飲んだことはない。

小林：自分で（飲むために）混ぜるんじゃないんですか？

扇：あまりね。蜜を入れ過ぎると甘すぎるちゅう。そんなら焼酎入れ足せばいいたい言うて。

小林：すごいなあ。

扇夫人：私たちの作ってるのはハチの蜜を採ったガラがあるでしょ。あれにまだ、蜜が残ってるでしょう。もったいないからそれを焼酎で洗って、そしてもういっぺん濾したのが私たちの蜜焼酎。

I-3. 島の景観変化

大石：ところで、対馬では人口がどんどん減っているとお聞きしましたが、どうなのでしょう。

扇：私ももう69年生きてますからね、対馬で。今は、いくらおる。

細貝：3万3千人ですね⁴。

扇：4万いくら、5万人くらいおったんじゃないかな、俺たちのときは、戦後。私、（昭和）21年（生ま

れ)です、戦後ですから。やっぱり、そのころ、対馬ではですね、いっぱい、私の子どもころは、段畑とか、段畑わかりますか？山の上に段々に、棚田みたいに、畑があって、そこに芋や麦。芋とか麦ですよ、畑は。

小林：お米ではなく？

扇：対馬はご覧のように、9割がもう山林ですからね。田んぼ作るっていうのは、微々たる土地で。だから、芋とか麦とか作るので、対馬は地理的に特別な場所にありますから、特別な動物もおったんですよ。頭に「対馬」がつくんですね。ツシマテンとか、ツシマジカとか、それから、ツシマヤマネコとかね。で、ヤマネコは環境庁⁵のほうで、一生懸命やりよるですが、なかなか増えるのは難しいと、私は思うとる。昔はそんなふうで、山に麦とか芋とか、それを餌にして、野ネズミもいっぱい発生をした。キジもそれを餌に

して育った。だけど、その畑がもうないんです。全部、今、木が生えてる。だから、雑食の動物っていうのは生き延びますが、肉食のヤマネコとか、イタチっていうのが減りました。テンは雑食だから増えました。で、コウライキジっていうのはゼロじゃないですけども、鳴き声が、今年1羽見ましたが、雌を。キジの鳴き声が聞こえんようになった。自然でいけば、そういうふうにいっぱい変わっていきます。だから、今度は、山のほうでいけば、昭和の時代、植林がありました。これがどれだけどう進んだかちゅうのは、瑞季さんが知っておるやろう。それで、私、ミツバチを飼うとるですから、蜜源の話をちょっとしますが、植林でやっぱり、蜜源が減ったっていうのがあります。それから平成に入ったら、イノシシが、ゼロになっとったイノシシが愛玩用に飼われたイノシシと思いますが、野に逃げて繁殖をして、今、対馬は大変なことになっています。

大石：元々島にいたイノシシですか？

扇：いたんです。だけど、江戸時代に陶山訥庵⁶先生、雨森芳洲⁷先生、彼らが主体になって全滅させてくれたんですよ。

小林：イノシシを？



図3 対馬野生生物保護センターで飼育されているツシマヤマネコの「福馬」

4 対馬市の人口・世帯数は、昭和35年には69,556人(14,472世帯)あったが平成27年11月末現在で32,520人(15,251世帯)に減少している(対馬市ホームページ・統計データ URL: <http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/deta/post-6.html> および『広報つしま』12月号: URL: <http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/live/kouhou/> (2016年3月8日アクセス))。

5 現在の環境省。対馬野生生物保護センターが設置され、ツシマヤマネコの保護・保全活動に中心的な役割を果たしている。

6 陶山訥庵(すやま とつあん):1658-1732年。厳原生まれ。別名を鈍翁(どんおう)とも。江戸時代中期の儒者で、対馬府中藩の農業振興に努めた。『猪鹿追詰覚書』、『老農類語』など多くの農書を著した。

7 雨森芳洲(あめのもり ほうしゅう):1668-1755年。滋賀県長浜町生まれ。江戸時代中期の儒者。中国語、朝鮮語に堪能で、対馬藩に仕えて李氏朝鮮との通好実務に従事。

扇：うん。

細貝：島内を、7ぐらいで囲ってですね、北部を囲って、猪垣っていうのを作って、そこにいるイノシシをまず全部捕って、それが終わったらまたそこから下がって、猪鹿追詰（いのしかおいつめ）⁸っていうのをして。

大石：すごいですね。

扇：そうですよ。イノシシを退治せんと、対馬では人間が生き延びていけん。だから、そんなことができたんでしょう。山に行ったらね、今も、なんですかこう、落ち込む穴、掘っとるんです。そこに落とし込ませて殺したっちゃう感じで、そういうところが、そう、まだ、私が子どものころやったら、山を歩けば何か所も見つかった。その上でも。

小林：イノシシは食料としては使わなかったんですか？

扇：うん、当時の食料、それは、食料として獲っていたとは考えにくい。わからんですけどね。

細貝：目的はほんとにイノシシをとにかく全滅させるっていうことだったんでしょうか。

扇：シカはね、やっぱり鉄砲です。狩猟したのは、肉さばいて、食べたことがあります。だけど、イノシシは食べるためにもらったことあるけど、食べたことはない。みんな横流し。

大石：あんまり、お好きではないということでしょうか？

扇：うん。食べたことはないですね。だから、今、そういうふうで、イノシシが増えて、対馬の農家は柵のなかで野良仕事をしています。それのおかげで、今度はイノシシの害で、草花の蜜がまったく採れんですね。

大石：採れなくなった？

扇：はい。そしたら、イノシシが増えたおかげで、山のなかにシカの餌がなくなる。イノシシが枯れかしてくるというんですね。根を掘りますからね、牙で。枯れるんですよ、草が。だから、対馬の山のなかは、草、生えてません。

小林：そうですね、昨日も見ました。

大石：それは、シカじゃなくてイノシシ？

扇：それはイノシシ、もちろん、シカもあるんですけど、イノシシの害です。それは。だから、シカが里に出てくるようになった。餌がないから。栄養失調で死ぬシカも見つかるようになった。いかに山のなかに餌がないかって。そういうことですね。そしたら、木の皮までシカが剥いで食べるようになった。木は枯れますよね。そういうことで、イノシシの害で、蜜源も平成になったら減ってきたっちゃうことですね。

小林：でもまた、どういう理由で、またイノシシは戻ってきたんですか？

扇：諸説ありますが、島外から何らかの目的で持ち込まれたという説が有力なようです。対馬には（動物を放してはいけないという）条例がなかった。そやけど、このね、谷の深い対馬にイノシシ放ったら、もう大変ですよ。

木村：じゃあ、最初はその外来生物のようにして戻ってきた個体が繁殖していったと。

小林：アライグマみたいな感じですね。

扇：そうそうそう。（ツシマ）ヤマネコもさぞ手を焼いていることでしょう。

8 イノシシとシカは江戸時代に深刻な農作物被害をもたらしていた。陶山訥庵の『猪鹿追詰覚書』によれば、1700~1709年にかけて、対馬全島を複数区域に分け、柵をつくって1区ずつ全滅させる方法で島全体からイノシシを全滅させたという。この事業の信ぴょう性について疑問視する見方もあるが、対馬藩の公式記録である『毎日記』には事業の実際について詳しく記されている（千々布義朗、「とらやまの森」第3号 p.5. 環境省対馬野生生物保護センター。URL <https://kyushu.env.go.jp/twcc/torayama/03/03-05.htm>（2016年3月8日アクセス））

I-4. 切らねば、木は太る

小林：昭和時代に植林が増えたっておっしゃっておられましたね。

扇：ええ。これはね、国の政策で植林をされたですけどね。この岩ばっかりの枯れた山のてっぺんまで植林をしても、木は太らんですよ。

小林：その背景には、戦前・戦中に木材のために森が切り拓かれたってことがあったのでしょうか？

扇：戦前のことがよくわからんですけど、森はですね、そのころはですね、薪で売ってたんですよ。

大石：それは、福岡とかに出していた？

扇：そうですね、あの運搬船でね。だから、私らが中学ぐらいまでは、もう日曜日だったら、そんな仕事させられた。このくらいに切って、割って、燃やす。

小林：炭にする？

扇：炭も戦後ね、戦後に20組、韓国から20組、対馬に来たんですよ。これは文献で私、知ったの。それは、韓国で当時役人をしておりましてという方が対馬に遊びに来られて、うちに来られたことがありました。それで、戦後に対馬で、炭焼きで20組ぐらいだったら生活ができるやろうっていう判断で、送り込んだっていうことを言われた。

小林：ふうん。それは、対馬の人が、そういう仕事ができなかったからですか？

扇：韓国は炭焼きが、そのとき、進んどったんでしょう。

小林：へえ。

扇：だから、そういうふうで、昔は炭とか、束にしてね。詰めてね。詰めすぎたら針金が切れたりして、そういうのでこうしてって、それから、また、チップにしたら、チップ工場に1トン9千いくらかで売れた。

大石：安いですね。

扇：30年後の今も、1トン9千円。そんな感じだったら、生活できる単価じゃないけん、山もどんどん、



図4 炭焼き窯（対馬市厳原町内山）

どんどん太りよるじゃないですか。

小林：太るってどういうことですか？

扇：もう、切らねば、木は太る。山切りがないから。

小林：はい。でも、薪で切っていたものは主にどういう木だったのでしょうか。檜とか？

扇：うん、もう、いろんな木があるけど。対馬あたりはね、対馬、シイタケが有名でしょ？シイタケの木も30年に1回はせめて切らんと、山がですね、クロヤマになる。クロヤマになるということはどういうことかいうたら、常緑樹林⁹になる。

小林：それが。よくないことだったんですね？資源として。

扇：檜は葉が落ちるでしょ？

小林：はい。

扇：で、冬になったら、常緑樹っちゅうのは、葉が落ちないでしょ？

小林：はい。

扇：だから、クロヤマになるというんですよ。だから、長く、もう35年も40年も切らなかつたら、芽をふかんのですよ、檜って。シイタケの原木に使う木は¹⁰。で、常緑樹のほうが、徒長が激しいわけね。だから山がどんどん、シイタケ原木は減っていくっちゅうことになるわけね。定期的に（25年から30年に1回程度）やっぱり、山の伐採をせんと。

木村：クロヤマになるって言われてるってことは、人が利用していた、その植林する前とかっていうときは、結構、明るい林（落葉樹林）だったということですか？

扇：そうです。だから、原木林は減るし、大変ですよ。

大石：それでも、一応今でも、シイタケの原木は島内でまかなってるっていう感じなんですか？

扇：ああ、対馬はまかなえますよ。

大石：すごいですね。

扇：いや、それも行政が手を出してくるようになった。シイタケ原木の育成林、原木林育成事業って言うのです。

桜庭：半額補助が出るんでしたっけ？

扇：うん、いくらかわからんけど、育成事業だから、シイタケ原木にならん木を切る。倒して、原木林だけを育てる、そういう補助金事業もあるんです。

I-5. 海の景観も変わった一磯焼けと害魚の網取り

桜庭：補助金漬けですね。

扇：なんでも補助金があんの。桜庭君も、補助金みたいなことでここに来てる。農林水産業、全部、日本の国は補助金だらけです。私も今日は朝5時半から起きて、網取りに行きました。これも補助金。

大石：網取り？

扇：今、有明海の磯焼けはテレビでも映るでしょ。磯焼けしてタイラギがとれんから裁判するしないと

9 対馬の潜在自然植生はシイタブが優占する常緑樹林であるとされている（福嶋司・岩瀬徹・(2005).『図説 日本の植生』朝倉書店）。

10 対馬では、シイタケの原木としてアベマキやコナラと言ったブナ科の落葉性樹種がもちいられている。伐採された樹木個体は、伐採後に出てくるシュートが成長し、萌芽更新することによって再生し、再び楢木として利用されてきた。ニホンジカやイノシシの急増によって、最近では再生してきたシュートが食害による樹木個体の枯死が増加してきているという（浅野悟史・(2015).「対馬市における原木椎茸をめぐる環境生態研究」対馬市しまづくり戦略本部新政策推進課・一般社団法人 MIT 編『平成26年度インターン・学術研究等要旨集—対馬を学ぶ、対馬で学ぶ』対馬市、pp.93-94.）

か。毎日1万円ずつ、漁師さんに罰金とか。そんなのが今ありようて。

桜庭：バリ¹¹の網ですか？バリ捕り用の、県から補助が出てる、なんか何匹か捕れたら申請してみたいな、それでしたっけ？

扇：そうそうそう。害魚駆除、藻場育成。藻が枯れとるんです。

小林：それは、定期的に起こるんですか？藻枯れっていうのは。

扇：いや、私が生まれて初めて今度なったけど、なかなかもう10年超えるやろうけど、復帰せん。

大石：なぜ、そもそも、そんなことになったんでしょう。

扇：それは、あんたたちが調べてくれよ。

小林：土地の人は、まったく見当がつかないのでしょうね。

扇：今、いろんな手立てで海にも補助金が落ち込んでる。

小林：藻が枯れるとどうなるんですか？

桜庭：小魚とかが育つ場がなくなっちゃうんですね。

木村：網取りってというのは、何をするんですか？

扇：網を仕かけて、害魚を捕るために、網仕かけとる。夕方仕かけて、朝取りに行く。今朝、行ったけどしけとって、1反ぐらい、50mぐらい手繰ったけど、またバックしたわ。放り込んで帰ってきた。また、明日の朝早く、行かないかん。

小林：へえ。

桜庭：立て網ですよ？網を立ててあって、そこに魚がズボッって入ってくるやつですよ？

小林：捕れたものはすべて扇さんが持って帰られるんですか。

扇：それは、もう釣っていい。お金はもろうて、魚ももろうて、カネにしちゃいかんですよっていうけど。今日、昨日獲れた鯛をあんたたちが食べる。

小林：あ、すごい。

扇：こんぐらいの鯛。

細貝：すごい。あっちもサザエが山のように。

小林：それは、誰でも免許があれば、できるっていうものですか？

扇：そうそう。装備を持って、船がいるし、ネットローラーがいるし、網がいる。

小林：結構、必要ですね。

扇：装備があって、経験があれば。

1-6. 害魚／害獣はまずい？

大石：害魚と言うのはどんな魚ですか？

扇：海藻食べる魚。

大石：何が悪い魚？カワハギ？

扇：一番食べるのはね。ウスズミ¹²とか。

木村：ウスズミ。

扇：ウスズミちゅう。

大石：あのちょっとグレに似たやつですね。

扇：そうそうそうそうそう。それとか、バリってね。針が強い毒持った、アイバリ。

大石：あれですか？アイゴですか？

¹¹ アイゴのこと。

¹² イスズミのこと。



図5 対話は、お昼にも海の幸の食事をいただきながらも続いた

扇：アイゴ。それとかクロ¹³も入るし、ほから、ノコノハダイちゅうのが入るし、それからね。沖縄からやってきたブダイちゅうのがおった。ブダイ。アカブダイ、アオブダイつって。わたしが元気なときは、4キロ5キロっていう時代があった。沖縄の人、美味しいって食べよるけどさ、あれ、まったく美味しくない。もうカマボコにしても食べられんやった。美味しくなかった。

小林：けっこうすごい、対馬の人、なんかもう豊かだからか、イノシシも食べない。

大石：舌が肥えてる。

小林：ねえ。豊かなんだなって思いますけど。

扇：やっぱりあれ、イノシシはねえ。あんまりなんでもかんでも食べ過ぎや。いややとたい。

小林：鹿は食べる？

扇：わがたち、仲間を掘り起こして腐っとも食べるしたい。そんなの見たら食べられんよ。猫も追っかけ回して食べようちゅう、追っかけ回しとっちゃんね。

小林：猫？

大石：猫食べるんですか、イノシシ？

扇：猫殺したり、猫も食べるよ。山猫もどうかしたらやられるよ。

大石：そんなことするんですか？

扇：猫殺しとるのを見た。なんか道路、山の奥にこう、フキ畑がある。したらなんかそのあたりがもう泥が、それで車停めておるから、なんしとっとやろかねと思ったら、そこで猫、猫死んどった。食べまではしてなかった。もうイノシシ、雑食じゃから、なんでも食べるでよ。

I-7. 五反百姓の生き残り戦略

小林：海での漁もされているということですが、ご両親の代から、代々、そういうことをされていたのです

13 メジナのこと。

か？

扇：いやいや、私は五反百（ごたんびゃく）のせがれですから。五反百姓ちゅうのわかるですか？

小林：わかりません。

扇：田んぼ、5反しかない。

小林：しかって。

大石：結構、広いと思う。

扇：とにかく5反の土地で百姓した、五反百姓。狭い。

小林：それはなんで狭いんですか？

扇：そんな五反百姓では、農業で対馬で生活はできない。だから、昔の五反百姓は何をしたかっつたら、炭焼き、木庭焼き¹⁴、イカ釣り。炭やなんか切ったりしたあとに、木庭焼き（こばやき）っていって、焼き畑農業でソバ作った。あと、綿花を作ったりね。俺は五反百姓のせがれだから、イカ釣りとか、そういうことをやった。

小林：その五反百姓の戦略、生き残り戦略っていうのは、だいたいみんな同じだったんですか？

扇：なんでもしなさいよちゅうて。百姓だけでは飯は食えんから。木こりの真似もしなさいよ。海がそこにあるから、漁師の真似もしなさいよちゅうて。

小林：でも“真似”なんですね、それはおもしろいですね。

扇：そうして生活を、子どもたちを、腹を満たしてやれちゅうて。そんなことなんです。これは俺が言いたいよとよ。たまたま私は木船を作っておって。櫓（ろ）漕いで。ガスランプと、子どものときは。それでね、イカ釣り行ったらイカをいっぱい来る。今は大きな船持って、発電機をバンバンたいて。楽に出て行ってするけど、あんまり変わらん。

桜庭：採れる量がですか？

扇：うん、釣れる量ちゅうのが。親父が三男坊の私を海の漁に連れて行くわけですよ。私は身体は小さかったけど運動はできたから。そしたらね、子どものときにそんなことを経験しとったらなんでもできる。大人になってから。私は電気屋でしたが、すぐ船買おて、すぐ当時はシイタケが今の2倍以上単価がしとったからね。

小林：当時っていうのは1970年代とか？

扇：ううん、昭和50年、60年やったね、だからそのあたりで。昭和51年に会社を辞めて、電気工事、看板あげたわけで、すぐそこに海があるから、すぐそこに山があるからっていうことでずっとやっただけです。夜はイカ釣り行ったり。冬場が暇やからシイタケ栽培したり。

小林：現代の百姓？

桜庭：ああ、かっこいい。

扇：だから乾燥シイタケを1トンとったこともあるし。1トンっていったらね。

細貝：乾燥したので1トンですよ？

大石：すごい量やね。

扇：乾シイタケ、私が1トン、弟が専業でシイタケ2トン。

大石：弟さんは、今でもやってはるんですか？

扇：いやもう、体がだめ。

小林：それは家族の山で？

扇：山は買って。

¹⁴ 焼畑農業のことを、対馬では木庭焼き（こばやき）と呼んだ。昭和初期まで、斜面地の森林を伐開して火入れを行ない、オオムギ、アワ、ソバ、ダイズ、アズキなどを作った。



図6 イカ釣り船



図7 シイタケの原木栽培（左）と生産物のシイタケ（右）。（対馬市厳原町内山）

小林：買ったんだ。

扇：原木だけを買いました。木だけ、この山、これだけで何10万とか。

細貝：炭はそういうふうにして買うって聞いたことがあったんですけど、山の木をね、買ってから、炭焼きする用の。シイタケもそういうことが結構あったんですね。この山の木を買ってっていうのが。

扇：持たん人でシイタケしようっていったら、あんた、盗んでくるわけにいかんから。

I-8. 大百姓と農地改革

小林：その五反百姓じゃない人たちが山持ちだったり。五反百姓じゃない人たちはどういう人たちだったんですか？みんながそうだっていうわけではない。

扇：大百姓、て対馬では言うたけどね、彼らはやっぱ山も持っているし、農地も持つとる。

大石：その方々は、庄屋さんみたいな感じなんですかね？

扇：そう、大昔でいえば、庄屋さんみたいな。だからここでもう、私たちのもとの百姓だった六代目は、立派な家を建てとるやろ、ここに。土地も、農地も山もいっぱいあるよ。

細貝：土地と農地は別なんだ。

扇：わたしのばあちゃんの妹が嫁いだところ、ここが結構大きい。波田さんの家、わからんか。

細貝：牛飼いの波田さんじゃなくて？

扇：そう、牛飼いの波田さん。

大石：牛飼いの方もいるんだ。

細貝：はい。もう馬いないんでしたっけ？波田さんの家。

扇：おらん。おらんやろ。

細貝：ですよ。

小林：そういう大百姓さんが牛も結構いっぱい飼っていたんですか？牛もたくさん、そういうのが財産だったり。

扇：当時はね、今は繁殖牛で飼っているけど、当時は農作業用ですよ。山の狭い道をどうもならん、機械は上がらんわけで。牛でも滑って膝を折ることがあった。そういうところで農作物を作っておったから。

大石：小作とかはあったですか、ここは？

扇：小作権っちゅうのは、戦後、小作があつとるですよ。やっぱりその地主が自分たちで作りきらん、小作に出しとるじゃないですか。

大石：大百姓さんのところの土地を借りて。

扇：そうそう。

大石：農業をしたりとか、炭焼きしたりとか、いうことですかね。

扇：小作をしとった人たちがいくらかもらわれたっちゅう、農地法改正されて。あれ、何年ですか？

大石：農地改革は戦後やね、1950 年前後ですよ。

扇：昭和 20 何年かじゃないですか？

細貝：1952 年とかじゃなかったかな。財閥解体と同じ時期くらい。

I-9. 補助金に“けつつまずいて、歩けない”

扇：だから今はもう結局は百姓。農地法っちゅうのは厳しいところはあるけど、なかなか対馬に農業専業で育っておるのはおらんわけ。

小林：ですよ、そういう地形じゃないですよ。

扇：だから農業者後継者の補助金じゃろ、あれも。そしたら漁業後継者事業っちゅうのもある。もう補助金じゃ。補助だらけで躓いて歩かれんくらい。

細貝：半農半漁 + α になります。半農半漁やる人。

桜庭：憧れる。

小林：補助金に「けつつまずいて、歩けない」。

細貝：すごい、面白い表現。

扇：だから俺が農業委員をしているときに、後継者がどうのこうのちゅう話が出て、後継者は親が作る品

じゃ。行政が作ってもまともにならんちゅう話をした。これは正論です。後継者っていうのは親が作る品で、これ行政が補助金くれて作る品じゃない。だけど、補助金でもくれて後継者を作っていかな、これ、どうも日本の国ばならんばい、政治家さんたちが思ったから補助金くれる。それで事業するわけだね。

桜庭：変な話ですよ。

細貝：自分が後継者にならない人が組み立ててるからですね。政治家ね。シイタケ農家さんとかが組み立てないから。

扇：補助金で助かるちゅうのはある。だけど、補助金は補助金で、あんまり今日本の国は多い。

小林：若い人たちは対馬で暮らすっていうことになるって難しいですか、今は？

扇：今、対馬で産業してもこの距離は縮まんやろ。これは政治家さんがいくら頑張ってくれても、対馬の距離が、消費地は福岡ですよ。対馬はね、長崎県ってしとるけど、長崎県に対馬市が手がけた事業はなんもしておらんで、福岡の駅前に「よりあい処つしま」っていう対馬のアンテナショップを出しています。そういうことをやりよるですよ。対馬の場合は消費圏は福岡なんですよ。だけど、壱岐は半分ですよ。壱岐のものは高く売れても、対馬のものは（そうはいかない）。

I-10. 畑がなくなっている理由

小林：また畑の話なんですけど、畑がなくなっているっていうのは、畑をやっても採算が合わないからとか、単純に、それが理由？

扇：それはね、麦植えて、芋植えて、金にする。山の段畑に登ってそこで作つけしても採算が合わんよ。

小林：それは自給のためではなくって、売っていたんですか？その芋と麦っていうのは？

扇：戦後ですから、五反百姓であれば土地は持っておる。飢えをしのぐためには自給自足をせざるをえん。現金収入があるわけではなくて、今はいろんな流通がしっかりしとるから、100円ショップ、そこに出したり、農協の販売と、大型スーパーが規制緩和できて、そこのコーナーにいろんな漁業者、農業者が置けるスペースも。そんなのにもね、一生懸命やったんですよ。やっぱり農協、野菜部会をやっとる所にね。

大石：漁協もやられて、農協もやられてたんですね、すごいですね。

扇：それはもう私は漁協の組合員ですから、漁協の理事もせないかんし、合併のときの理事で大変でした。

桜庭：うわあ、大変そうですね、そういうとき。

扇：もう2度とせんぞっと。農業委員も、農協の組合員で農地は持たんけど、借りてすれば資格はできるわけ。だから農協の組合員。そしたら農業委員もせないかん。

桜庭：回ってくるんですか？

扇：農協の理事は断った。おかしいやろうちゅうて、農地一つも持たんと俺が理事したらおかしいやろちゅうて。持ってるお前たちでせにやつて。農協の理事はしていないです。漁協の理事と農業委員。もう10何年か前ですね。もう12年になるかな、農業委員やめて。

I-11. 昭和の時代は植林、平成になったらイノシシー問題は蜜源の量

大石：森林の景観が変わった。イノシシが増えて、草花が減ったっていう話をされていたと思うんですけど、そうするとやっぱ、ソバ畑とか、農地のお花とかのほうが蜜源として重要になってくるっていうことはあるんですかね？

扇：だけど、ソバは、さほどの蜜持たんじゃないですか。美味しくないですよ。

大石：あんまり美味しくない？

扇：俗にソバ蜜ちゅうのは色が黒いんです。ソバのガラの。

扇夫人：すごく味も濃いし。

扇：そいでね。美味しくないけんね。この重箱式でやったらね。蜜の色が黒くなるんです。

大石：見てわかる。

扇：熱で、巣が焼けるでしょ。

小林：お醤油みたいな色ですよ。

扇夫人：黒い。

扇：したら、蟻でできとる巣ですから、熱で黒くなるんですよ。それがこうやっぱり染（し）んで、蜜にこう浸み込む。色が黒くなるちゅうのは。それとか花粉も混じったら、色が黒くなると。だからソバ蜜と間違えられる。そうだけど決して対馬の蜜にソバは入ってません。ソバ蜜は。なぜなら遅い時期の花ですから。

木村：ああ、もうすでに、採蜜は終わってると。

扇：いや、採蜜は終わらんでも、採蜜、大体、ソバ蜜を残して採蜜の状況にあるとですけど、入ってもそのあたりの蜜は越冬のあいだで使うてしまうんです、ハチが。だから、来年採る蜜に、去年のソバの蜜は含まれてないから。

大石：植林になったりとかいろんなことがあって、蜜源はどっちかっていうと少なくなっているんでしょうか？

扇：ですね。昭和の時代は植林って言い方、私はしますが、平成になったらイノシシが出るんですよ。

大石：味は、そうするとどうなんでしょうか？長い目で見たらやっぱり昔のほうが蜂蜜美味しかったとかってあるんですか？味は変わってきていますか？

扇：どうでしょう。

小林：変わってるでしょうね。変わってることは変わってるでしょうね。

扇：いくらかはね。変わるやろうけど、舌で確かめられるほど、わかるほどの変わり方はないと思いますよ。なぜなら、対馬の地形が変わってないちゅうことが1つですね。いくらだったって、山が9割ですから。それは変わらんですからね。

小林：山の木の種類は変わってますよね。

扇：木は変わっても、何割ともいかんや、微々たるもんですよ。

大石：地域によって違いますよね、植生が。あそこはツバキが多いよとか、あそこは、シバ、カヤとか、あそこは最近、パルプで伐ったとこばかりだみたいな、そういう地域によって味の違いって出ますか？わからない？

扇：ところどころ、山がこう伐られたなあちゅうのはあるけど、それが1キロも2キロにも及んで、伐採されたちゅう状況にはないですから。対馬の場合。そんなことは考えられんですよ。

大石：こう、あそこの島の西側のほうがさらさらした蜂蜜やとか、そういう飼い方のほうが重要ちゅう感じですかね。

扇：そうですね。だから問題は蜜源の量。稼働する範囲内に、半径1キロとかいう話になっているんですけど、2キロ圏内で分担しておいて、この里で何群飼えるか、そしたら巣箱のサイズはどのサイズで何群飼えるか、これですよ。

小林：はいはい。計算できますね。

扇：うん。そういうふうにして蜂飼いをせんと、安定した蜜の採ることはできません。去年、回ってですね。下（しも）のほうの内院¹⁵ちゅうところですね。40群持った、あんた1人ですか、って言っ

15 対馬市厳原町南部にある集落。

たら、いや、ほかにも5群持ったり、10群持ったりして。いや、あなたの里でそら多すぎます、つって。そら、つぶれますよ、つって。ああ、私もそら思いよったっちゃけど、ちゅうて、こんな言い方されて。そしたら、だからその半径1キロに何群飼える、どのサイズで何群飼えるか、そしてみんなで話し合って、何群ずつ飼おう、つって、その話がなかったら蜂飼いはよくなりません。昔はそうでした、つって。里に2、3名しかハチを持ったりする人がおらんやったちゅうこと。そしたら蜜源がいっぱいだから自然に巣を作った。木の洞とか岩の割れ目とか、そういうところまで巣を作るほどハチがおった。蜜源は減った上に、蜂飼いが増えて、もう今は対馬のハチはアパート探すつうのに全然苦労がない。もう選り好み、自分の好きなところ選んでそこに入るから、アパート余るとる。

小林：だれが1番いいアパートを提供させるかですね。ミツバチを増やすっていう努力はみんなでされるんですか？

扇：ミツバチを増やすちゅうのは大切やけど、ミツバチばかり増やせば蜜は採れんわと。なんでハチを飼うとつとやちゅうて。いや、蜜をいただくために、そんなら確実に、俺がその12、3群、10群、採蜜をして、予備群に2、3群、ちゅうのでずっと、この10年間、10年間はずうっと10群、10群、10群って、県に報告せにやいかんのがあるんです。お金にするもんやから、お金にせん人はせんでええけど。そやけど私はお金にするから、注文がずっと来るわけ。それがもう今年もずっと来るけど、2、3年、蜜採れませんからちゅうて。金にする人は、申告をせにやいかん。去年から義務化されましたからね¹⁶。

小林：申告が必要になったのですね。

扇：はい。義務づけられたちゅうて、税務課がそうして来たり、どこが住民課が来たりするわけじゃなくて、それを聞いたことがあってもせん、めんどくさいからせん人は多いし、調べる人はおらん。もうそういうわけいかんから。

小林：ハチを増やすっていうのは、たとえば蜜源を増やそうっていうそういう意味でもありますよね。

扇：だからそういうこともミツバチ部会の顧問をしとるときに話はしてますけどね。だから私は、天気やったらずとこう、道路をてっぺんまでないどるけん、登るっちゃっけど、いろんな花を見ると。ツバキはそこに自生しとる、ツバキは全部残したり、ビワをこういっぱい採る。ビワちゅうのは、今からもう花咲いとつですよ。9月から。9、10、11、12、1、2（月）。8月からだったか、半年間はね。ビワちゅうのは花咲く。

小林：そんな長かったでしたっけ？

扇：早生から晩生まで。入れよったら。

小林：あ、そうか。いろいろ入れる。それ、いいですね。

扇：だから、越冬の花粉採りとか、寒いときは蜜あんまり出さんけど。1回、今度冬になったらツバキ咲く。ツバキはね、蜜も採る。花粉。あれはもうマルハナや、クマバチじゃなくて。鳥のフンや。ツバキの花にさえずるあれは。だけどミツバチもどんどん来ます。春先はサクランボ。サクランボ早い。菜の花といっしょごろ咲く。ほいで、それより早いのが梅でしょ。梅の小梅。小梅ちゃんとかちゅう梅、早い。

小林：大体、人が植えてるものですね。意識的に植えるものは植えて、そのほかにも森に行って。

扇：そうです。ほいでね。山にあるので、早いってというのは、ヤマザクラ。これ、蜜たっぷり持ったりするんですよ。だからヤマザクラでやろう、って言って。私は今ね、裏の山にね、仮植まで言うたら40群、

¹⁶ 平成24年、養蜂振興法の改正により、「蜜蜂の飼育を行う者」は「蜂群数」と「飼育の場所及びその期間」についての申告が義務づけられた。



図8 ゲンカイツツジを訪花するニホンミツバチ（写真提供：浅野悟史氏）

この狭いところやけど。ヤマザクラを。だから、植えるところあったら、苗やるよ、つって。仮植しとる苗が10本あまりあるから、そうも言う。だけど、いやあ、おれもハチ持ちちよるけ、1本植えよう言うの1人もおらん。

小林：ほんと？

大石：いないの？

小林：へえ。それ、面白い意識ですね。

扇：だから裏山、もう今、子供の結婚記念樹でヤマザクラ植えとって、こんな大木なっとるもん。孫は20何歳か。ヤマザクラは、いいですよ。梅も40本ぐらい植わっとるやろ、裏山に。栗も。

小林：栗蜜も、独特な味で美味しい。

扇：栗は、ちょっと苦みがあるから。

大石：藤蔓なんかも、蜜は採れるでしょうか。

扇：藤？あ、藤もミツバチ、来ますよ。だけどあれ、マルハナ（バチ）ですね。桐もマルハナですね。木でね。多いというのはまあサクラ、ヤマザクラはよく来ますね。来るですよ。柘植。

大石：庭の柘植のことですか？

扇：柘植ですよ、これ。これ、こういう柘植で、これは早いです。2月の末ごろに、ハチが巣分けしたぐらい止まります。それで玉柘植って、庭木にしとる、あれは5、6月に咲きますね。柘植はね。よう、蜜持っとる。それから、ハゼ。ハゼがよく持っとる。昨日、蠟燭採りよったんです、ハゼ。かぶれるけど、ハゼはよく持っとる。それからツルではツタ。私、今もうあれやけど、そん前の倉庫もそちらの倉庫も幽霊屋敷みたいに、ツタが生えとる。なんでそういうツタに蜜がたっぷりある。

小林：それはもう、養蜂を始められた昭和51、52年ぐらいからもう自分で調べて。

扇：うん。調べて。

小林：見て、これはいっとるなっていうのを。

扇：気づくやない、ハチが。ハチががががん羽音立てる。なんの木かなっていえば、そう。もう、ハゼ、柘植ちゅうのは、ツタちゅうのはすごい。それにヤマザクラ。

小林：ハゼって育ち遅いですか？

扇：ハゼ？

大石：ハゼ、早いと思う。ウルシ科じゃない？

扇：ハゼはね。春、何月かな。6月かな。

大石：ハゼは、けっこう早いですよね。5月か、6月か。

扇：うん。そのころよね。

大石：あの仲間は。

扇：モミジ（カエデ類）に花咲きますか？

桜庭：モミジは？

扇：花咲かん？

木村：花咲くんですけど、多分、昆虫用の花じゃないですか？

扇：ほら、都会の人はだめやね。モミジはね。しっかりと花持つとつとよ。ミツバチもよく行きます。見たことないとね。モミジの花というの。

木村：種しか見たことない。

小林：うんうん。でも種があったら花もあるはずですよ。

扇：苗は見たことあるね？あれ、種が落ちとるけん、苗が出てきて。だから、対馬の人でもね、モミジはね。葉っぱが赤いと花付けんと思うて。

桜庭：あんまり、でも花ってイメージないですね。

扇：モミジの花、だからモミジは花つくつとるよちゅってからに。花付けてからおまえ、木は増えんやろうもん。花、しっかり花付ける。ミツバチ、よく行くよ。ハゼとかには、そんなには行かんけど。

I-12. ニホンミツバチの減少

細貝：対馬はじゃあ、ハチが多いんですか？

扇：昔は多かったけど、今ね、もうだめね。今、減つとると思う。吉田先生いったのはちょっと来て調べてくれって言われっちゃけど、それが。このブルード病っていうのはやっぱり壊滅状態にするけん。だから今、仁田や佐護や、佐護によっても神宮さんっていうのがおって、仁田に西山さんっていう左官をしとる人がいる。神宮さんは大工さんやから。あれはまじめに来つとった、聞きに。だから、今年の冬は疎開させるいうて。どっか豆酏あたりがいいぞいうて。

桜庭：あったかいほうにってことですか？

扇：うん、もう豆酏のほうに疎開させる。

桜庭：へえ。

扇：扇さん、全滅したら扇さんのところへもう持ってきますよって。俺のところ近いけん、でけん。来年までだめぞ。壱岐が、壱岐の後輩が病気が2年続いたいうてね。だからあの、まあそれは参考にせないかん。

大石：扇さんのところは今のところ大丈夫な感じですか？

扇：全滅ですよ。病気にかかって、ずっと蜂児が、あの、幼虫になれば成虫がウイルス菌もつとるけん。成虫は体力あるけん、どうもないです。子どもにうつるじゃないですか。

細貝：はい。

扇：死ぬ。死んだら引っ張り出す。子出し病。その順繰りで、もうあの、群が少なくなれば、ツヅリガが入って産卵をする。そしたらもう、ツヅリガの幼虫になったらもう巣を侵されて蜜はとられるし、いやがって逃げる。逃げたところでまた巣を作って、生活はしとるけど、どうなつとるかわからん。おる、裏に1群。

大石：森のなかにおるっていうことですか？

扇：裏に空の巣箱を置いて、そこにおる。そしたらそれに入つとる。ツマアカが来るもん。ツマアカ



図9 ニホンミツバチの巣箱を襲うツマアカスズメバチ（写真提供：浅野悟史氏）

スズメバチ。はあ、ろうは、蜜ろうを塗っとるけん、ろうを取りにくっとかなと思って。翌日も行ったら、またツマアカがもやもやする。そしたら、また行ったらミツバチがおるようになる。とぼおんと入り口、ツマアカがおらん、来とらんとき。ミツバチがおったとかってつって。

大石：ツマアカは、ミツバチを狙ってくるから、そいつが来てるってことはニホンミツバチもおるといことですね。

扇：群れが生き残っている後輩から蜂をくれるという話があるが断っています。

大石：蜂をもらったり、人にあげるのは嫌だということですか？

扇：そんなもんですよ。

小林：人によって蜂と相性があるから、とかそういう関係があるんですか。

扇：いや、そういうことじゃなくて、やっぱり、我がと同じように可愛がってくれるかっていうか、その心配がある。

小林：そうですね。

大石：子どもみたいなものなのかな。

扇：だから、嫌。だけど、頼まれていっぱいあっちこっちやりました。

I-13. サックブルドー病

大石：内山という集落に昨日行ってたんですけど、そちらのほうではもう全滅しているっていうことでした。

扇：あれは去年全滅した。サックブルドー病で。ツマアカも出ておる。去年全島にまわっておった。私は、ニホンミツバチは病気を持たん、病気にかからんハチって、聞いてましたがね。

大石：こういう文献はご自分でお集めになったのですか？

扇：これは、まだ、吉田先生が生きとるうちやったけんな。これは玉川大学の『ミツバチ科学』。月刊誌で出しよるんですよ。

桜庭：そっちの病気のほうがひどかったんですね。

扇：サックブルドー病はウィルスやから感染する。

大石：サックブルドーも、外から来たんですか？

扇：これはですね、南九州からずっとあがってきておったんですよ。だけどね、南阿蘇とか佐世保とかの新聞やテレビから問い合わせの電話があるけど、もう復帰しています。

小林：それはどうやって復帰されるんですか？

扇：それにかからんハチもおるわけ。

大石：耐性が出てくるということかな。

扇：全滅するわけじゃない。どうかして生き延びた奴がおる。だから今年も、去年豆蝸にも逃げとる奴がおって、1羽だけでした、豆蝸。内院から浅藻、内院、久和、豆蝸。おかあさんとずっと回った。そしたら豆蝸に1群おった。

細貝：1群だけ？

扇：うん、だけどその1群も正月前に絶えたっちゃうて連絡もらった。それからずっと西を回ってきたら、佐須に4群おった。だけど耐えるで、サックブルドー病にかかってないのが2群だけやった。それがどうなっとるかまた確かめればいいが、今年¹⁷。

大石：ツマアカは、そのブルドー病にかからないんですか？

扇：かかってくれりゃあええがなあ、体力が違うが。

大石：やっぱミツバチだけがやられてしまう？

扇：まあそう、ニホンミツバチは病気にかからんっていう神話で今まできたとですよ、そやけど。

木村：かかっちゃうんですね。

扇：壱岐は病気の発生が早かったですよ、壱岐は。平成22、2年だったかなあ、平成23、4年だったかなあ、壱岐が早かったんですよ。もう大きさもこうこうして、こう引っ張り出してできんちゃうちゅって、ひっちらかすけえ、あんまりいじりすぎや言いよって。そうしたらねえ、吉田先生が。だけどころなのあったらちょっと、もうまた15年またっちゃうのは大変やなあ、何年かかかるかなあ。

大石：それでもいっぱい飼ってはった人は大損害ですよ。

扇：だからあの、上（かみ）のほうで去年1人が50群持ったと。大河内ちゅうところですが。ほたら、ほかの人、もう大変やったとかちゅて、西山さんちゅう人がよう、それがそげん言うけんね。ほかの人もよう何群か持って、大河内やったら平井さんも10何群か持ったぞ、つって。たぶん同じ巣の里に50群も60群もおったら、そりゃもう全滅ですよ。そこで精力のいいやつだけが残る、生き延びるちゅうか。だから、50群もいうたら商売ぞちゅて、ねえ。

大石：昔は商売でやってた方おったですか？ずっと対馬で。

扇：おりません、私がハチをやるまではおりません、この里でも3名でした。

木村：ほんとにみんな趣味、副業じゃないけど、趣味くらいのレベルでやってて、っていう感じですかね。

扇：うん、それもう巣箱がね、このくらいよ。

木村：ほんとにもうちっちゃいの。

扇：だから俺んところから言うたら、俺んところ最高で、1番増えたときちゅうのは、吉田忠晴4万羽言うたけど、そりゃあ、先生、4万羽おらんぞ。

木村：4万羽、ううん。

¹⁷ 2015年12月、扇氏のところに、中対馬のサックブルドー病に感染していない群を去年（平成26年）に病気が出ていた場所（下対馬）に持って行ったら、1群が5群に増えたという連絡があったという。したがって、サックブルドー病によるニホンミツバチの地域個体群の絶滅は一時的なものである可能性がある。

扇：おらん。通常の群でねえ、2万羽がほんとですよ。

木村：じゃあ4万羽っていうと、2つの群ぐらい。

扇：あれでね、ちょっと採蜜体験もやりよるつつつたら、なんで私に教えんとですかって言ったら、先生に教えるようなことじゃないつつつて、平成19年から農業青年部つつつところで採蜜体験毎年しとったんです。子どもさん連れで参加されたり、蜜をきらせて、ほんで持たせてやって、そこで息子の嫁がホットケーキ焼いてくれたりすりゃ蜂蜜つけて食べる。去年まで青年部で毎年やとったんですよ。そやけど今年は電話あるけど断ったんです。

木村：すごいでもこんなにもいっぱい、すごいですねこれ、これ全部蜜ですよ。

扇：(平成)24年。大豊作。

大石：その次の年、落ちたっていう話でしたけど、それは予測してはりました？

扇：予測はできん。採蜜はみんなですね、このあたりは全部5月とか6月とか、ちょろちょろ7月とかに分蜂させるんです。そしたらね、意味がない、分蜂させる意味がないんですよ。それから集める蜜はないちゃから。群も太らんし。だから仲間たちには、3月の終わりから7月の頭に分蜂するように扱えと。いや、扱えずどうするかちゅうと、蜜を大層採らんちゅうこと。

木村：でもみんなそれがわからないから、採っちゃって。

扇：まあ、私のような群にはしけらんよ、みんな。やけん、それは駄目よ。

大石：見たかったです。

扇：それはね、一生懸命指導するけど、もうやっぱ長いあいだやれば、いや、来年が予測できんから、こと蜜があるうちに。

小林：採りたい。

扇：いっぱい採れと。

大石：採りすぎちゃう。

扇：採りすぎですよ。私の2倍。

小林：指導っていうのは？

扇：去年なんかわしの同級生もう昭和50何年、今度6名ひっぱりこんだとですけどね、この里から。同級生のやつが1人おっちゃけど、私の2倍採とるもん、ハチの数一緒で。だから。

大石：そこらへんはやっぱ人間の欲とかいろんなもんがでますね。

扇：もうそれは欲ですよ。

小林：その指導っていうのは、扇さんが学んだような、同じような方法で自分も周りに教えるのか、扇さん流の教え方があるのか、それともこう、言葉では伝わらないものってありますよね、こう、感覚的な。

扇：ここに来る人には、そこまで話す。ここに聞きに来る人は。だけど、私が走りよつとる、ちょっと寄って蜂飼いよるからそこで話す人っていうのは、そんな細かいこと話しても意味は通じん、わかる？

I-14. 環境の予測はできない

扇：分蜂してね。「7月に分蜂をして、自分と入ったとよ」つつて、電話があつた。それで、「いやあ、阿比留さん、分蜂、今する時期じゃない」つつて、「そら、巢虫¹⁸が湧いとうろ」って。「巢虫がもう産卵をして、幼虫に孵る状況にあるやろ、そら、自分の子(ミツバチ)が逃げとるとよ」って、(そうしたら阿比留さんは)「いや、蜂洞前にはハチはおるっちゃ」つつて。「いや、そりゃあ、逃げるぞちゅうことをわからんで働きに出とったハチが、帰って来て、夜になったからそこにおるとよ」つつ

18 ハチノスツヅリガ (*Galleria mellonella*) のこと。

て、言うた。「は、そんなら、ちょっと出かけるけ」言うて走って行ってみたら、「扇さん、おまえさま、おまえさま」って、「あなたがちゅうこと、そういう言葉言うところ、おまえさまに言われたとおりでした、なかは空っぽでした、言わるるように、巣虫が多くなっちゃりました」、えじゅうしこつ¹⁹。えじゅうしこつ。

大石：えじゅうしこつ？

扇夫人：えじゅうしこ。

扇：おそろしいほどに湧いとるわけたい、もう。いっぱい、こう。そんなことがある。だからそういう状況を、まだその方はわかってない。それから養蜂、ハチを持っとる、ハチッポ²⁰を持っとるとかいう人が、「扇さん、巣虫はどうかならんとですか、巣虫はミツバチの敵じゃねえつ」って言われる。それは、蜂飼いが熟練されたの、蜂飼いの知らん人。ツヅリガは敵じゃありません、同居人です、いう言い方をするか、「ツヅリガにやられて困る」ちゅう蜂飼いはまだ熟練、蜂飼いのね、わかってない。

小林：でもそれは共存させるための、方法が。

扇：共存じゃない、共存はできんちゃけど、巣虫がなかに産卵をさせん、しきらん、巣箱のなかに入りきらん、ハチの扱い方をしないと。そこが甘い。

小林：でもハチから、じゃその環境の状況がわかるっていうのはたとえばどういうときですか？

扇：それは、ハチの蜜の溜め方で、3、4、5、6月に雨が多かったら蜜は少ない梅雨や長梅雨とかあるじゃないですか、対馬。日本の場合は、四季。この梅雨の時期ちゅうの大きく左右されて、梅雨が長ければもうその年は蜜は。だから雨年ちゅうけど、雨の多い、梅雨の長い雨年というのはイモ類が不作。蜜、蜂蜜も不作ちゅうな。

小林：でもこれからなにかが起こるかもしれないっていうような、予期的な行動はしないですか？

扇：それはわからん。

大石：地震が起こるとか？

扇：もうそれがわかったらもう、俺はすごい。

大石：ミツバチからね。いろいろなこと聞いて。

扇：わかったらもう世界中から引っ張りだこよ。



図10 対馬の伝統的な巣箱である蜂洞（ハチドウ）。
樹木の幹をくりぬいて作られる

I-15. ハチを理解してないハチ飼いやが増えた

小林：（ニホンミツバチが絶滅して）ミツバチ部会はどうなったんですか？

¹⁹ 対馬弁で、「ぞっとするほど。」の意。

²⁰ ミツバチの分蜂群、群れのこと。

細貝：前ニホンミツバチ部会っていうのがあったんですよね、対馬市に。

扇：それ平成 19 年に、私のスピーチでポッとできた。

大石：すごいですね。

扇：懇談会したんですよ、平成 19 年に。森林組合長と農業普及所の鳥居所長っちゅうのが蜂蜜が好きな所長でなあ。アドバイザーと呼ばれたんですよ。ミツバチの話はせんで、私は昭和 50 年から現在までの対馬のニホンミツバチの状況、蜂蜜を商品化するためにはどうするか、ちゅう話をしたんです。名前はどうでもいいちゅうて。とにかく組織を作らないかんいう話をして。あのときは福田内閣かな、19 年。国家に負けんように、早く組閣をしましうちゅうて。そしたらポッとできた。ちょっとあとでしたら後悔したけどね、早過ぎたなちゅうて。ちょっと熟成する期間がちょっと欲しかったなあと。だけど決定的なのは、去年のサックブルドー病。やっぱりそれから平成 25 年の凶作。このあたりが大変だったんですよ。24 年は私が何十年やっとなるけど、最高の豊作の年やった。だけど、25 年はどーんとね、凶作。

細貝：へえ。それは花が少なかったからですか。

扇：蜜源が少なかった。季節の、気候の具合で。だけどそれに気づかんハチ飼いが、ばっかりじゃから、どおんとハチを減らしてしもうた。蜜のとりすぎで餓死。越冬失敗。ハチを理解してないハチ飼いや屋さんばかりだから、養蜂業じゃないから。趣味の養蜂やから。そこに巣箱置けばハチが勝手に入って蜜ためてくれる、それをもらう。

桜庭：金のなる木みたいな。

扇：ほどほどもろうてたらいいんじゃけど、もらいすぎるからハチは全滅。

細貝：ふうん。そのどれぐらいとるかっていうのは、気候によって毎年その、判断しないとイケないんですか。

扇：あの、蜜のとめ方で、採蜜の量の判断をせにゃいかん。それ誤ったらやっぱり採り過ぎたなと思えばやっぱり餌を与えてくれるとか、ちょっとした施しを自分たちでできる。冬になって蜜源はない、持ってこうに持って来られん。

細貝：じゃあ砂糖水でもなんでも。

扇：そしたら、蜜をもろうとっちゃったら、砂糖でいいから与えてやる。これを怠る、やる道をわからん。そこに気づかん。そういうハチ飼いが多くなった。俺のせいで。

大石：せいっていうのは。

扇：昭和 50 何年かね。厳原町、六町、対馬ありまして、今対馬市やけど。厳原町と、上県町、峰町。公民館講座。ミツバチの話してください。それをしたとたん、ぽっと、あの、ハチ飼いやも増えて、後輩だ、あんたのせいよっていうけど。そのころに吉田忠晴²¹が来た。対馬新聞とか評論家。対馬新聞か書いとったちゃやろ？俺が講演したの。「私の重箱式」っていつて重箱式の養蜂箱について 30 分間しゃべったっていうのがあったんですね。

細貝：講演会の内容っていうのは知らないんですけど、それは対馬で採れる蜜が特別だっていうことをおっしゃられてたってことですか？その時期には。

扇：あの、そのときは言ってません。そのときは私もまだ始めて何年かだから。私は、昭和 51 年か 52 年からミツバチを自分で持った。51 年に東京農大で小田原の農園か。田村さん。もう亡くなってる。今養蜂家の藤原誠太さんっていう先生が、ようしゃべったり本書いたりしよるけど、その方の先輩

21 吉田忠晴(よしだ ただはる)。1946 年北海道生まれ。玉川大学学術研究所ミツバチ科学研究施設教授。専門は養蜂学、昆虫行動学。著書に『ニホンミツバチの飼育法と生態』(玉川大学出版部、2000)、『ミツバチの絵本』(編著、農山漁村文化協会、2002) など。

やね。彼も東京農大で。その先生がここに来られて、それで私もあの、電気工事でこうね、電気工事のことで九電の所長が、扇君、相談にのってやるよって言うけんが、山の奥におられてね、電気がないって。電気を引こうって言って、相談に来られたけど、もう何十万も負担金かかる。昔はね、そうあったんですよ。今何キロ内だったら無償で九電引くけど、昔はそうもいかなかった。それでもう、そこあきらめて、何年かおられたけど。あの、帰られてね。

大石：その田村さんって方はもともと対馬の方ではない。

扇：ええ、ない。小田原。神奈川の小田原市で農園をしてあるわけで。それからあの、出身校は東京農大。それだけしか知らんと。

小林：ふうん。

扇：それであの、一緒に彼もその、特別詳しくはなくて、対馬にミツバチがいっぱいおるってということで、あのう、花粉媒介用に増殖研究をしてみようって言って来られた。

大石：農業のための花粉運びのためっていうことで。

扇：うん。

大石：ふうん。蜜をとるほうはどちらかっていうとおまけみたいな感じ。

扇：そうそうそう。だけど、あの、もうやっぱり何か月も家を空けるしね、奥さん厳しいかったな、厳しい人やった。それで帰られてね、最後送ったよ、もう。ハチを。送った。途中から戻ってきたりね、巣が落ちて。それで1回送り届けてくれって言うたら、嫌ですよ扇さん、持って帰ってきますよって。1週間扱こうて、また送って、そんなことしたことある。



図 11 扇さんと重箱式巣箱

I-16. ハチを好きになりなさい。怖いと思ったら石になりなさい

大石：え、でも始められて2、3年でそれだけ声がかかるっていうことは、すぐに養蜂で有名になられたっていうことですか？

扇：あのね、これはね、私あの、そうですよ。あの。

大石：ですよ。

扇：田村先生が帰るときに、あの、なんも教えんとですよ。ただそばで先生扱いよとか、いろいろ見とるだけで、なんも教える人ではなかった。それで、帰るときにね、最後にね、ヒントをくれた。あの、言葉は、ハチを好きになりなさい。怖いと思ったら石になりなさい。

桜庭：へえ。

扇：それから、扇さん、あなたは成群で飼うてみなさい。これだけ。

桜庭：それを、もう律儀に守って。

扇：うん。成群で飼えってどういうことやって。人間の生活と一緒にやから、ちっちゃい家で子だくさんになったら子ども育てられんけん、家を多くせにやいかん。増築せにやいかんやろ。だから大きな巣箱で、増築可能な、ちゅうので重箱式作ったのよ。

桜庭：ああ、そういうことですか。

扇：それであの重箱にした。だから今日本全国で重箱が出とるけどね、はるかに早かったと思う。田村先生も重箱じゃなかった。コンクリートパネル4枚切ってうちつけた。長い箱に。群の状況に応じて箱を増やしたり減らしたり、ハチにやさしい採蜜ができる。

桜庭：へえ。

扇：コンクリートパネル真ん中でずうっと切って釘で打ちつけてただけ。それでもミツバチはそこで生活するんです。結構する。岩の割れ目とか、木のほらとか、そういうところでいっぱいニホンミツバチは営巣して生活をしたりしました。昭和50年ころ。

大石：そういう天然のやつもとったりとかっていうのはされることはあったんですか？

扇：そうですよ。だからあの、昭和51年、1年間でここからここ田²²ですよ。だからあの、仁位っちゅうところにトンネルひとつうえたところなんです、途中なんです、曾の、この中間ぐらいのところにおられたと。この中間。だから電気も通とらんけんものすごい距離行かなきゃいけん。この先生はおられた。だからここにね、ここから24本運んだ。分蜂分が入って。

桜庭：ほお。そこにあの、蜂洞のなかに捕ったミツバチを入れて、運ぶってことですか？

扇：箱を置いとけば、ミツバチが飛び込むけん。

大石：自分で入ってくる。

小林：じゃあミツバチを愛しなさいじゃなくて、ミツバチに愛される人だったんだ。

扇：そのころはだれでも、巣箱を置けば入ったっちゃんない。

小林：へえ。そんなに。

扇：すごかったですよ。

小林：心の広いハチがいっぱい。

扇：それでね、最初から、先生今年は1年間先生の手伝いをします。来年から自分で巣箱を作って、自分で山置きますから、入ったのは私にくださいって言った。もうそれで。そしたら、扇さん、1回、ハチの入った巣箱、これを使わねつつってから。もうそんなのはてきめんですよ。とっておきの巣箱。

細貝：そうですね。はいはいはい。

扇：うん。蜂洞にはね。あの、そうしてくれたですよ。だからあの、昭和52年からハチを飼うてます。自分のハチを。

桜庭：へえ。51年はその先生からいただいた。

大石：たった1年だけ。

扇：1年間はまあ、私も遊んでるわけじゃなくて、ちょうど電気工事を始めたばかりですからね。あの、1年目ですから、電気工事の稼ぎはよくなかったですし、イカ釣り行ったりね、もう夜になったら漁師さんみんな出とるけど、8時ごろとことことこと出て行ってね、イカ釣りして。そんなことをしよったんですよ。

22 対馬市豊玉町田。

I-17. ツマアカスズメバチ

扇：だから、入ってきて、あれ何年？勉強しとらんだね。

桜庭：え？ツマアカですか？

扇：平成 20 何年？ツマアカが対馬で発見されたのは。

桜庭：ああ来たのですか？え、おとし、昨年かおとしぐらいでしたっけ？もっと早かったでしたっけ？

扇：（平成）22、3 年じゃないか？

桜庭：そんな早かったでしたっけ。

扇：（平成）25、26 年ここ出たちゃから。24 年か、24 年峰町ぐらい。23 年かなあ。22 年か 3 年か。あの、村山さんっていうて、佐護の方が、「へんなハチがおるね」っていつて。そしたらたまたま、京都産業大学の高橋純一²³という先生がおるとよ。これ、玉大の吉田先生教え子じゃ。学生のときにここに来たことあるし。ハチの研究に来よったけん。あの、捕まえとってっていうけん。

小林：見ていいですか？

扇：ツマアカこれです。これがツマアカの女王です。ほとんど。1 番働きバチがおります。

細貝：うわあ。

小林：すごい。扇さん捕られたんですか？

扇：そうですよ。純一先生が、研究材料にするけん、とととって、また来るけんっていうけ、はいはい、言うとなら、来やせん。

扇：吉田先生が誘うたら、金ないけん、来らん言うて。最近はツマアカ出てからよう来よるとよ。

桜庭：そうなんですか。

小林：え、じゃあそういう、問題の解決っていうのはそうやって先生を、研究者を呼ぶんじゃなくて向こうから来てくれるんですか？たいがい。

扇：彼は自分の研究で、これは高橋先生が来よったんです。

小林：高橋先生が。それはでも扇さんから、島の人からこういう問題が出てるっていうことを聞いて来られたんですか。



図 12 ツマアカスズメバチ (*Vespa velutina*)
(出典「対馬の昆虫館」URL: http://yohbo.main.jp/vespa_velutina/vespa_velutina.html)



図 13 オオスズメバチの液浸標本

²³ 高橋純一 京都産業大学総合生命科学部生命資源環境学科准教授。分子生態学、養蜂学の研究者。

扇：高橋純一先生は私知ったから。玉大の吉田先生のきつと教え子ですよ。それからここに来たことはあるしね。

桜庭：これマルハナ（バチ）ですか？

扇：これマルハナ。マルハナが対馬にはね、3種類おるとよ。オオマルハナ、コマルハナ、チョウセンマルハナつつてね。で、去年あたりはオオマルハナがものすごい出たとね。

扇：これオオスズメ。

桜庭：怖いですね、オオスズメバチやっぱ。

扇：これ刺されたら気持ちいいぞ。

桜庭：気持ちいいですか。

扇：あの、威嚇したらね、頭の上飛んどったら、カチカチ音をたてて。カチカチ。

大石：そんな音がするんですか。

扇：これはね、もう古いっちゃが、古いけどこれも色いいやろ。

桜庭：きれいですね。

扇：ほら、なんか液体が。専門の液体やから、色変わっとらん。これ、ホルマリンたまたまあったけ、ホルマリン、消毒剤、これホルマリンに漬けたら色変わるやん。

桜庭：ちょっと黒ずんじゃうような。

扇：変わっとらんもん。これも純一先生。

大石：これどうやって漬けたですか？これ。

扇：網で捕って殺して。全然手で殺しゃいい。

桜庭：ええ。

扇：だけどあの、あんたたちが手で持ったら、クマンバチは大きいから、こう、尻のほうこう曲げて、刺すよ。

I-18. ミツバチ研究者との付き合い

大石：扇さんは刺されない。

扇：いや、刺されんつかみ方あるさ。だからそれをあの、吉田忠晴でも、ミツバチを捕ってから捕まえてこうして、こうするけん。それはもう嫌がりよっとに。もうやめとけ、刺さるぞ。

大石：吉田さんもやっぱりハチを怖がらない。

扇：そりゃミツバチ、あんた、博士やもん。博士号持っとってよ。手が荒れるっていうの、あの、荒れるとよ。こうやられたらフェロモン出すと。げな、フェロモンで助けてくれっていつて。

大石：仲間が来る。

扇：仲間がびりびり、びりびりしだすわけだ。もう尻をね、びいっとね上げてね、するわけ。吉田先生、やめとかんや、もう刺さるるぞ、言うたら、「そう？」て言うてやめたがね。俺、後輩のところで、あの、こうすれば刺されんとよ、こうすればハチがつかめるとよっちゅうのを俺の後輩に見せようと。そしたらね、もうそんなことしとったらいっぱい刺さるるとやけどな。あの、それは大事なことで、女王バチを捕獲するときには、どうしても手でつかまんと、捕れんじゃないですか。だからあの、私もようやるが。探そうっていうときにはないじゃけん。ないな。

大石：その触り方とかは、あの、吉田さんから教わったですか？

扇：いやいや。それあの、熟練。いろいろ。私も吉田さんにはずっと教えとるわけやけん。

小林：扇さんが。

扇：そうそう。ヨーロッパミツバチしかわからんがな。で、ニホンミツバチで当時私のところに彼が出てきたときにはね、ニホンミツバチの資料は、これ²⁴しかなかったんですよ。これはね、吉田忠晴先

生のね、先生の岡田先生が書かれて、養蜂研究所から出しとる。このときは、どっか非売品って書いてある。

大石：町田市、ほんとやね。平成2年って書いてあるね。

扇：この資料しかなかったんですよ。だからここでずうっと教えとる。吉田先生に。ああじゃこうじゃって。

大石：吉田さんは逆にもうあの、そういう文献とか送ってこられたとかそういうことがあったってことですかね。吉田さんのおつきあいていうのは。

扇：うん、だからあのブルード病とかツマアカの文献をすぐ送ってくれるっちゃんない。だから対馬の歴史とかちゅうのも、あれは山口先生とかが書いとるのを送ってくれたり²⁵。あるわけよ。ほかにもミツバチ神社とか、いろいろあるんですよ。いろんなことが。

I-19. セイヨウミツバチとニホンミツバチの交雑実験

扇：ニホンミツバチはだいたい色が黒いんですよ。

小林：へえ。

扇：ヨーロッパミツバチは黄色いんで。特にあの、気温の寒いときに生まれてくるハチっていうのは色が黒くなるね。扇さん、来年な、冬毛持ってくる（って言って）。

小林：冬毛？

扇：それから、2年目にこれ持ってきた。

小林：真っ黒。

扇：ヨーロッパミツバチの処女王ですよ。現在交尾したけん、処女王じゃないばってん。処女王を持ってきたんです。対馬のニホンミツバチの雄バチと交尾をするかどうかっていう研究。

小林：ああ。

扇：交尾をしてどうしてやって。

大石：セイヨウミツバチと、ニホンミツバチで。

扇：交尾。

大石：子どもができるかっていうのを。

扇：子どもは、できません。雄バチしかね。だけどそれを、世界でやったことないこっちゃけん。研究者っていうのはもう気持ちがいかいて。

大石：それ逃げ出したら困りますよね。

扇：こんなふうでね、出とって、出たあ、何時何分つって全部テープ引っ込んどってね、あとで整理する。で、ああ失敗とかね。これ2年目に成功したんです。それでね、まあ喜んで電話してくるけん、そうやそうやって言ってね、またアラ²⁶ 鍋かけてお祝いしてくれないけんって。

桜庭：アラ鍋でいいですねえ。

扇：そんなことをしておった。

細貝：でも、その交配して成功したものは対馬にはいない、いるんですか？

扇：これは、交尾はしましたが、有精卵ができん。有精卵は遺伝子が違うから、これ生まれない。

小林：じゃあF1（雑種第一代）ですね。

24 岡田一次.(1997).『ニホンミツバチ誌』玉川大学出版部。

25 山口裕文.(1998). 照葉樹林文化の一要素としてのニホンミツバチの養蜂 -- 対馬のハチドウとハチドウガミを事例として.『ミツバチ科学』19(3), 129-136.

26 クエのこと。

扇：有精卵が働きバチ、女王バチで、無精卵がオスバチなんです。

木村：うん。オスバチは生まれるんですか？

扇：うん、女王バチは、無精卵のオスバチは生むことができますよ。

I-20. ミツバチ神社

桜庭：へへへへ。

扇：そしたらまた翌年にやって来て、たまたま区長さんも総代さんも、後輩で知っとったし、神主さんもう知っとる方で。

複数人：へええ。

扇：神社の大祭のときに行ってね、お願いしたら気持ちよく、はいはいって言うて。

大石：その神社に蜂洞がある、のですか？

扇：峰の小牧宿禰神社²⁷のそばに、こう蜂洞が置かれとる。

小林：ふうん。

扇：これが本殿で。左右に2つ神社がある。なんだか知らねが、そのそばに、これが置かれてた。この地区の、阿比留さん以下、何名かの有志がですね、蜂蜜が、感謝してこう、神様に祀った。だいたい大正のね、初めつつうのはね、神様だらけやった。

桜庭：へええ。

扇：ずうっとこの田舎にね、対馬に。大正の。

小林：大正。

扇：初めやっちゃけん。

小林：初めまでは、多かったってことですか？

扇：いやいや、そういうことじゃなくて。

小林：大正に増えた。

扇：人間が、神頼みをするときや。

複数人：ああ。

扇：日本の国も不安定なときやわ。神様助けてくださいよ、ちゅうときたい。

大石：そのときに蜂蜜を供えたってことですか？

扇：蜂蜜は貴重がられとるですよ。砂糖は、思うように手に入らんし。

小林：そうですね。

扇：さあ、蜂蜜ちゅうのはすごいし。だから、扇さん、ハチは誰にでもつかんとやろ、とか言う人が多いけん、それはの、独り占めにする口実やねえか、つって言われる、言い寄るけど、うん。だけどやっぱりこういうふうに祀るちゅうのは、すごいなあと思うのよ、俺は。

小林：ほかにどういうものが祀られてたんですか？

扇：恵比寿様とか金毘羅様とかね。

小林：でもたとえばサザエの神様とかは。

扇：サザエの神様ない。海の神様、恵比寿様と。

小林：でもミツバチってのは、すごく具体的な対象じゃないですか。

扇：ミツバチは、その地区の何名かの人が連名でこう、祀ろうやと、というような感じで祀った。ほいで、この蜂洞は、これ去年。

大石：ご神体っていうことじゃないですよ？

²⁷ 長崎県対馬市峰町三根にある神社。

扇：いやいやそういうことじゃない。これ、峰の阿比留さんが、この蜂洞は寄贈したちゅうて、これ昭和62年の話。ここに据えたのは。

小林：そうかそうか、それ。

木村：なんかその。

小林：結構最近なんですね。

扇：うん。

木村：うん、そういうことか。

扇：だから、これを根掘り葉掘り聞いたら、やっぱりそうやった。ただ文献²⁸にはエノキっち書いとるけど、エノキじゃなかったけど、まあエノキでいい。その木は残ったけん、俺、確認に行った。切られとったら。エノキじゃなかった。これエノキじゃないなあと思ひよったら、そうだった。そいで話聞いたら、おやじの時代から、そこ祀ろったから、昭和62年に神社を1つに、3カ所ある神社をば両脇に据えて、1カ所に祀ったから、その神社のそばにこれを据えたっちゃあちゅうて。で、これを、この神主さんがこれしたと。ここで祀ったちゅうことよ。それが昭和62年ちゅう。全部。

小林：そこにはミツバチが入るんですか？

扇：入りません。仕掛けをすりゃ入ります。これ、どうかして入れてくれちゅうは入れられます。けど入れたら管理をしてやらないかんけん。

小林：そうですね。

桜庭：面倒みてもらわんと。

I-21. 巣箱にハチが入る仕掛け

小林：仕掛けっての、みな同じなんですか？その。

扇：うん。

小林：人それぞれの。

扇：だから今、対馬の人はみんな、仕掛けはわかっとっです。なぜなら私が全部教えたから。俺よ、独り占めにしようとか、ちゅうのじゃなくて、やっぱり商売として成り立たんとじゃから、やっぱりミツバチ可愛いんですよ。あなたも可愛いけど、ミツバチ。

小林：怖かったら石になります、みたいな、ははっ。

扇：みんなで楽しめばいい、ちゅう話。それをしとるけど、人間はね、やっぱり先生、欲があると。そしてね、師匠どんの言うことが聞けん生徒が出てくるわけね。なぜ欲があるかいうたら、蜂蜜ちゅうのはおいしすぎると。これまずいっちゅうたらね、欲出らんのよ。

小林：なんかチベットかどっかの話で、蜂蜜をいっぱい食べたら地獄に行くというような、なんかほんとに貴重な食べ物として、食べ過ぎたら運が悪いよってというような、チベット、ブータンではなかったと思うんですけど、そっちのほうで。

扇：食べ過ぎたらね。

小林：そういういわれがありました。

扇：俺もね、来てから、蜜を採蜜したときにして、素蜜のままガブっ、これ1番おいしいね。何回もいっぱい食べるやろ。

小林：はいはい。

扇：お前めまいがくっぞちゅうて。めまいがくるの、頭。甘い。

小林：甘いから。

28 山口裕文、前掲論文。

扇：そんなのあったんですよ。で、チベットあたりは、対馬の二ホンミツバチよりもっと大きい。

小林：そうなんです。

扇：オオミツバチっていうの。

小林：はいはい。

複数人：へええ。

I-22. 採蜜の仕方で糖度が変わる

扇：だけど、花粉入れても味は変わる、色変わる。対馬の蜜で変わらんやろうちゅうてて、いや変わりますちゅうて。よく東京のお役所の方とかが、扇さん、ここ、蜜が1番おいしかったちゅうて言うから、お世辞かなあと思う。蜜のいいまずいは採蜜の仕方やな、そうすれば。イコール糖度やね。糖度。

小林：採蜜の仕方で糖度が変わるんですか？

扇：変わる。

小林：結晶、え？へえ。その周りにある植物とかっていうわけではなく？

扇：うんんん。

小林：扇さんの周り。

扇：そこまでの研究はしてないけど、巣が、全部蓋をしとる。蓋をしとる部分は、80度以上出ます。

大石：糖度が。

扇：糖度が。そして対馬の蜂蜜がおいしいちゅうのは、夏の暑い時分に熟成をさせます。巣箱のなかは（摂氏）45度、50度なるやろ。普通ハチがおる、ハチがこう、子どもやなんか抱いとる中心が45度、ミツバチは。スズメバチは45度で死にます。だけど採蜜をするときに、蓋をしとる部分だけ採れば、80度は越えます。これはさっき見せた吉田先生のはね、あれ蓋をしとらん部分があったら遠心分離器にあれかけられるやつやから。ビヨーンって遠心分離機で出してしまう。そしてそれをとって、今度は蓋を削って開けて、ビヨーンってやる。削った場合は70何度しか出らんけども、あとの分は80度絶対超えるわけ。

小林：へええ。

扇：ほんで、吉田先生、今度はいつ来る？とか言ったら、8月末に来よります。で、まあ、蜜のいいときやけ、減っとらん。9月になったら減ると。

桜庭：蜜の量がですか？

扇：うん、量。自分たちが消費するし野原に蜜源がないと。だけど、そらわかっとなるけど、9月採蜜ちゅうのは、そのあったかい摂氏50度もある夏の間、8月のあいだを巣箱のなかで越させる。これはもう熟成できるん間違いないやろ。40度の風呂の湯でも湯気出るわけやから。発散するやろ。俺はそんなこと狙うてね、昔から9月20日ちゅうのを、9月20日言いよったけど、9月。

小林：あと3日じゃないですか。

扇：一般に9月中に採蜜を終えるに変えた。その理由は、セイタカアワダチソウね。

複数人：ああ。

扇：今、本土のほうもいっぱいあるでしょ？

小林：はいはい。

扇：黄色い花が、こう、だんだんにね。あれがね、動物系の臭いがして、ミツバチの越冬の蜜源には適しとなるけど、人間がなめる蜜にはまずい。臭いがきつくて。

小林：蕎麦よりもきついんですか？

扇：蕎麦はね、我慢できる。

複数人：ふうん。

扇：蕎麦はね、植物系の臭いじゃから我慢できる。動物系の臭いはあかんかった。

大石：生臭いということですか？

扇：そうですね。異様なね。

大石：それいつごろからですか？セイタカアワダチソウに。

扇：場所によってね7月に開花する花もあった。だけど、聞いたもんだから行ったけどミツバチはそんなに寄らんよったね。何日も通うた。10月になったら開花します。そろそろ一斉に花つける。10月に入ったらもう、採蜜は9月いっぱいでは終わるにしまった。だけど、こう、気候変動があったらね、気をつけとかんと。

木村：うん。早くなるかもしれないですね。

扇：うん。だから、セイタカアワダチソウの蜜は採り込まないちゅうふうに。最近は、言葉を変えたんです。これ正解。だから、ま、ミツバチの話だけは的確に喋れるあいだは喋らんとな。ちゃんと喋りますから。

I-23. ハチミツの薬効

小林：でも薬味があるっていうのはなにが違うと思いますか？その、対馬の蜜は薬として。

扇：これは私も研究者じゃないけん、なんも、医者でもないし、わからんですが。

小林：薬として蜜を食べるってのは、世界中にいろいろあります。

扇：蜂蜜に殺菌作用があるちゅうのは、わかるじゃないですか。ピラミッドに蜂蜜が出たとか。

私がね、昭和50何年かに、福岡の朝倉郡から、古賀与吉っておじいちゃんが、当時84歳のおじいちゃんが、酒と焼酎とカメラとカバン持って、ここまで来られた。

桜庭：へええ。すごい。

扇：ヨーロッパミツバチ飼うたことあるっちゃけど、ニホンミツバチをどうしても飼いきらんつって。小田原の田村先生、私の師匠。新聞に載られたけん、それ読んで、小田原行ったら、いや私はミツバチ飼いに成功はしてない。対馬に成功しとるのがおるから、住所と電話番号教えますから訪ねなさい、つって言われたつって。電話かかって来て、よろしいですよつって。ほいで何日か、2晩か3晩か泊まられて。カメラいっぱい撮って来た。なんができんかっちゅったら、そばにヨーロッパミツバチが、養蜂家があったから、だとですよ。その、なんでそんならニホンミツバチかっちゅうて。友達が医者に見放されて、胃潰瘍で。医者に見放されてやせ細って、もう死ぬのを待つばかりです。だったが、ある日、田んぼの畔を刈っていたら、その友達が来よったちゅうて。それでそこで座って、お前は病気やったとに、どうして治ったとか？ちゅうて聞いたら、ニホンミツバチの蜂蜜をなめたちゅうて。続けてなめたちゅうて。胃潰瘍治ったちゅうて言われたそう。その話をされたね。胃潰瘍に効くとかと。

小林：ニホンミツバチの蜜がいいのか、対馬の蜜がとくに薬味が高いのか。

扇：それは対馬の蜂蜜とは言っていない。だから朝倉の蜂蜜でしょう。

I-24. 対馬産ハチミツの蜜源植物

小林：はいはいはい。でもなんで対馬のミツバチはこんなに特別とされると思います？なんかすごく質が高いとか。

扇：あのね。

小林：はい。それは環境っていうか、何が違うんですか？

扇：それは、蜜源の違いと思う。

小林：蜜源。

扇：壱岐は、山が低いじゃないですか。対馬でいうたら丘やな。桜庭くん。丘があるなっちゅう感じ。だけど、壱岐でも1つ大きな山があると。神社祀られたな、山があるとよ。そこのなかに持って行けちゅって、子出し病にかかったの、持って行けて、俺後輩に持って行かしたと。しかしその蜜は対馬の、俺の蜜に近い蜜がでけた。だけど、なんとなくコクがない。ないのよ。もう俺よりお母さんのほうが舌肥えとる。それでね。何かなあと思って、考えたらそうやね。山の樹木の蜜。草花の蜜。この差が出たかなあと。あそこに、しかもイノシシもおらんと。

小林：ふうん。それ、たとえば、ニュージーランドのすごく特別な薬味のある、蜜。マヌカ・ハニー²⁹だ。なんか最近日本でもすごく高価な値段で、それは薬味があるとされていて、それはメチルグリオキサール（methylglyoxal）とかいって、科学的に分析がされていて、それが高いものが高い。それは殺菌作用とかすごく生成されたものがもう病院でも使われているっていうような。持ってますよ、私。

桜庭：へええ。

扇：それ、植物の力やね。

小林：たとえばマヌカの木から採れた蜜が、特にその作用が高いっていうふうに言われてるんですけど、そういう研究ってのは対馬ではされていないのでしょうか。

扇：対馬には研究者は1人もおりません。知っとる人も、おりません。まあなんとか、対馬のミツバチの話がなんとか聞けるかなあちゅうのが、私であって、ふふっ、やっぱり全部できません。

小林：でもおいしいって評価されるのは、絶対的なねえ、なんか特別な環境があつてのことで。

扇：それは、樹木の蜜は、やっぱりいいんじゃないかなと。

大石：そのね、セイタカアワダチソウはもうどうしようもないって話でしたけど、逆にツバキとか、ナラの木とかシイの木とかいろいろあると思いますけれども、その、味を濃くするっていうか、そういう植物っていうのはありますか？蜜源植物で。

扇：味を濃くするちゅうのはね、私はこの夏の期間を思いやるわけで。

大石：熟成の。

扇：もう減りよるわけですよ、8月。蜜の量がね、1番多いちゅうのは、だいたい6月末です。植物が蜜出すちゅうのは3、4、5、6月です。どうかしてずれ込んでも7月までは、たまる年がある。だけど8月は絶対減ります。9月も減るでしょう。9月の後半から10月はね、なんとかまたたまるやろ。秋の花が咲く。

小林：はいはい。でも、あえてそこで採るっていうのが、対馬の特徴。

扇：そうそう。

大石：8月咲く花から採る。

小林：たまってるものに追加されていくってことか。

扇：8月の花はもう、蜜をためるほどは絶対ないですよ。で、だからそれを採るちゅうこともないね。

木村：6月までに、採る。

小林：その夏の期間を熟成させるのが。

木村：うん。だからそれまでに集めてた。

大石：その、特定の蜜源植物っていうよりかは、いろんなものが混ざってっていうこと。

扇：百花蜜ですよ。百花蜜。

29 マオリ語のマヌカとはニュージーランドの原住民であるマオリ族が薬として使っていたギョリュウバイ（*Leptospermum scoparium*: フトモモ科）のことで、この樹木の花から集められた蜜から作られる蜂蜜がマヌカ・ハニーと呼ばれる。

大石：百花蜜。

扇：雑蜜。

小林：うんうんうん。千花蜜じゃなくて。

扇：セイヨウミツバチが移動養蜂っちゅうんですね。だけど対馬のハチは、私が、固定養蜂とか趣味の養蜂とか、庭先養蜂とかつて勝手に言いよるわけで。ま、移動養蜂と固定養蜂とは違います。

小林：移動っていうのは対馬のなかで、移動ってことですか？

扇：対馬に移動養蜂はありません。

I-25. 花のかおりとカブトムシのかおり

大石：色はどんどん黒くなってくもんですか。

扇：なるなる。酸化しよるけんですね。だけどこれ臭うてみてくれ。こちらとこちらと。蓋あけて、香りを。

小林：ふううん。

扇：しっかり嗅いで。

木村：(糖度) 82 度のほうです。ほんとだ。なんか、深みが違うっていうか、なんだろなあ。

大石：うん。香りが全然違う。

細貝：全然違うよ。

木村：ですよ、全然違いますよね。

細貝：すごい、いい臭いする、そっち。

桜庭：ほんと、全然違いますね。なんかこれカブトムシの餌っぽい臭いがする。

小林：ははははは。じゃあこっちは？

細貝：蜜の発酵臭がする。

大石：うん。

小林：そっちは発酵してない。

細貝：してない。

小林：花の香りがする。

複数人：うん。

小林：けどこっちは、確かに、おがくずがちょっと酸化したにおいがする。

桜庭：カブトムシですよ。

小林：カブトムシ、そうだね、そうかもしれない。

大石：窒素が多いのかな？

扇：どうでした？

木村：全然違いました。

細貝：こっちのほうが・・・。

扇：ちっちゃいほうは、完全に酸化しとった。

細貝：酸化してる臭いがします。



図 14 ハチミツの香り確かめる細貝

扇：酸っぱいやろ。

細貝：はいはい。

扇：こちらは、少し始まったなっちゅう感じ。

木村：少しは、してるって感じ。でも・・・。

細貝：でも、コクがありそうな臭いがします。

木村：すごく甘い香りがする。

細貝：うんうん。

扇：はい。あなたたちは、うちの犬と同じように鼻がいいね。

複数人：ははははは。

大石：とりあえず、全滅されたってということで、今またじゃあ、自然に戻ってくるのを待っておられるという・・・。

扇：まあハチを求めるなら、いくらでも来ますよね。あっちこっちで喋ってますからね。

対話のまとめと考察1：養蜂で繋がる人と自然環境

対馬は山から海へと続く急峻な地形でできている。田畑として利用できる平野の面積は対馬全体の1割程度と小規模であり、残りの9割は山地である。このように自然環境の多様性が高く、島嶼として日本本土および朝鮮半島から隔離されていることから、対馬にはツシマヤマネコやツシマテン、ツシマジカなど名前に「ツシマ」とつく固有種が数多くみられる。ここでは、こうした対馬の自然環境が人の生活様式や利用の変化とともにどのような変遷をたどってきたのかについて、またそうした自然環境の中でもとりわけ、本座談会のキーワードとした「ミツバチ」の餌資源であり、対馬の養蜂家が提供する蜂蜜の蜜源ともなっている植生景観について、扇氏との対話を振り返りながらまとめてみたい。

対馬の山地部は、大きく分けて「段畑」と「人工林」の2つの用途で利用されており、残された部分は自然林であった。段畑とは一般に段々畑とよばれ、棚田と同様に傾斜地を段状にした畑である。山地が大部分を占める対馬では数多く存在し、かつては、この畑を利用して芋類や麦が育てられ、こうした作物の一部はノネズミやコウライキジの餌資源になっていた。さらに野ネズミはツシマヤマネコやイタチの餌となっていることから、段畑は食物連鎖の基盤としての役割の一端を担っていたといえる。しかし現在、段畑は山に登って作付けをしても採算が合わないという理由から利用されておらず、結果として段畑の作物に依存していたノネズミやコウライキジ、ツシマヤマネコの個体数は減少した。一方で雑食性のツシマテンなどは生き延びることができたと考えられる。

森林は、昭和には国策による植林が行われ、人工林はその面積を増加させた。この植林は主に薪を生産するために行われたものであった。植林された当初は薪やチップ³⁰として利用でき、そこから収入をえることができた。しかし、石油利用への転換とともに薪の利用は減少し、チップもその採算がとれないことから利用が減少した。そのため、かつては落葉樹もみられ明るい疎林であった森林は、常緑樹が鬱蒼と茂る地域住民の呼ぶところの「クロヤマ」となった。この変化によって下草は衰退したと考えられる。

平成に入ると対馬では新たな問題としてイノシシによる獣害もみられるようになった。対馬では、江戸時代に農作物被害など人の生活を脅かすという理由でイノシシの駆除が行われ島内では根絶された。しかし、平成に入りペットとして飼育されていたものが野に逃げ繁殖したという。やがてイノシシは山地部の草花を根から掘り返して食べ、下草を減らした。さらに、これによりシカの餌資源が減少したことで、シカが樹木の皮まで食べるようになり、樹木の枯死が起こるようになった。

次にこうした自然環境の変化についてミツバチの餌資源、対馬の養蜂家が提供する蜂蜜の蜜源という観点

30 チップは製紙原料として利用されている。

からみでみる。昭和の植林は結果として対馬における自然林の減少と人工林における下草の衰退を引き起こしたと考えられ、ミツバチが蜜源として利用する草本植物への影響が懸念される。また、人為によるイノシシの再侵入・繁殖は、イノシシの食害そのものによる草花の減少という直接的影響もさることながら、イノシシの下草掘り起し、シカの樹皮剥ぎによる樹木の枯死という間接的影響をも及ぼした。これは、草本植物だけでなく、木本植物に対しても大きな影響を与えており、その蜜源としての機能を衰退させた可能性がある。以上のように、対馬においてはミツバチが利用する蜜源植物の減少が進んでいると考えられる。しかし、扇氏は森林の変化はほんの一部で起こっているものであり、蜜源植物がすべてなくなったというわけではないという見解を示していた。

最後に、蜜源植物の減少に対して、対馬の養蜂はどのように変化しているのか、また今後にふさわしい養蜂の在り方はあるのかという疑問について扇氏の言葉をもとに考えてみたい。かつて対馬における養蜂は小規模なものであり、1集落に2、3名が蜂洞をもつような状況であった。その養蜂はあくまで趣味、楽しみの1つであり、商用目的ではなかった。また蜜源も豊富であり、森の中で木の洞や岩の割れ目などにもミツバチが巣を作っていた。近年になり養蜂の技法が扇氏によって体系化され、島中に養蜂の技術が広まるようになって状況は変化し、扇氏の確認したところでは40基もの蜂洞を設置している集落もあり、商用目的として養蜂を行っている事例もみられる。このように蜜源の減少が懸念される中、蜜源の量を考慮しない養蜂が進んでいる。こうした状況に対して扇氏は、まず半径2キロ圏内程度で蜜源の量をもとに集落ごとに設置できる蜂洞の数やサイズを決める、すなわち生態学で言うところの環境収容力に合わせた個体群数調節を提案している。また、それだけでなく蜜源となりうる植物を意識的に残したり（例えばツバキなど）、植栽する（ビワ、ヤマザクラ、フジなど）といったことも提案しておられた。

このように、養蜂を軸に自然環境を捉えてみると、ミツバチだけでなく、その蜜源植物、その蜜源植物が生育する環境、その環境に影響する人の生活様式や自然利用についても深く考えることにつながる。このように対馬における養蜂は自然環境と人との関係性の在り方を測る一種のバロメータの機能を果たせると考えられる。

対話Ⅱ 扇さんとの座談会を振り返って

Ⅱ-1. コミュニケーションの難しさとお補助金行政の言語

大石：じゃ、全体の反省会をしましょう。

桜庭：うん。この3日間の。

小林：大石さん。今回の目的は何だったですか。

大石：この座談会企画の目的は、研究者（に限らない、あるいはアーティスト、あるいは地域おこし協力隊）と地域社会が協働することの可能性についてどんな問題提起が可能か、はっきりさせることでした。

大石：さきほど、色の話をしましたよね。

小林：コミュニケーションの話ですね。

大石：どういうふうなコミュニケーション。コミュニケーションの難しさの話をしていたと思うんだけど。

小林：難しさっていうか。

大石：ひとつは、その研究者みたいな学者が来て、調査をするにしてもなんにするにしても、地域の人と付き合うときに、権力っていうかパワーを持って入ってくるんだけど、そのこと自体に気づかない研究者が多いというような。

細貝：研究者だけに限らないと思うんですけど、よそから入ってくる人たちは。補助金に躓きそうって話がありました。

小林：そう、そういう表現。上手な表現だった。

大石：よそから補助金を引っ張ってくるのに、やっぱり研究者とか学者とかっていう人たちの・・・。

小林：言葉が必要だということ。補助金の判断をしている人たちが、そういう、けっこう特化したコミュニケーションしか受け付けられないような仕組みになっている。

細貝：うん。「業界用語」じゃないとわかんないからだよな。

小林：うん。判断ができない。「気持ちいい」とか、「美味しい」だったらわからないような。これだったら不十分な表現だっている人たちが、補助金の良し悪しを決めてる。大石さんと私と何人かで、身体の柔らかさと野菜の美味しさっていうことに、関係性があるんじゃないかっていうような研究を遊び半分で京都大学のアイデアコンテスト³¹に出したの。その結果、見事、素晴らしいって言ってくれた人と、全然何を言っているのかわからないっていうような人たちとに、コメントが分かれて落選したんだけど、そのわかる人たちの意見と、まったくわからない人たちの、その。それもやっぱり、そのカラー、何を伝えようとしているのかが想像ができるか。大学関係のなかでやり取りされているような言葉では表現しきれない柔らかさとか美味しさっていうのが、全然伝わらない人と伝わる人とに両極端に分かれたっていうところが1番面白かったんだよね。(落ちて)やりがいがあるなと思ったけど。

木村：わからないって言ってた人は、なんでわからないんですか？何がわからない？

小林：どう評価するのかかわからないとか。柔らかさってなんだとか。柔軟さ。だからなんか、うん。

大石：曖昧な言葉が2つ入っていたからかな。体の柔らかいっていうのはどういうことなのかっていうことがひとつあって。もうひとつはやっぱり美味しいっていうのも、やっぱり感覚に関わる言葉で。両方曖昧だから、どっちかが硬い話だったら、もうちょっと伝わりやすかったのかなと思うんだけど。

小林：おいしさを「糖分が高い」とかにしてしまうとか、なんか。でもそれだったら面白くないもんね。

大石：うん。そういう世界の話をしたんじゃないっていうのは書いたんだけどね。

小林：そう。書いたつもりだけど。見事にわからない人たちがいた。

大石：ハチと対するとき。体の使い方であるとか。刺される／刺されないって話はちょっとしたけど。もうちょっとそこらへんの話は突っ込みたかった。ちょっと主旨とずれるから。興味あったんだけど。

小林：それはまた今度。

II-2. レジデント学生／レジデント研究者と地域づくり

大石：うん。桜庭さんは、大学を休学してこられて。また大学院に戻られようとしていて、なんかやりたい研究のイメージとか変わりました？

桜庭：もうガラッと変わりました。

木村：うん、まあそうですね。

桜庭：そもそもこっちは来たのが、地域づくりを仕事にしたらどんなんだろうっていう。そういうのを仕事にしてみたいなっていう気持ちがあって、こっちに來たんですけど。もうそのさっきの「美味しい」とか、「柔らかい」とか曖昧な言葉と同じように、「地域づくり」もすごく曖昧な言葉で。なんかそもそも自分のなかで、結局ある意味、地域づくりっていう言葉に逃げてた面があって。なんかもう、いろんなことを具体的にしていかないとだめだなという、その根本的なところが、まずガラッと変わりました。

大石：じゃあ今度はまた、そういう地域づくりのことを大学に戻ってやられたいと思っているの？

³¹ 京都大学学際着想アイデアコンテスト。平成25年度より、京都大学が学際的な共同研究を促進する目的で開催している。小林・大石は湯本貴和霊長類研究所教授らと「身体がやわらかい人の野菜はおいしい!？」というテーマで応募したが一次選考で落選した。

桜庭：うん。今度はもうちょっと。地域づくりに関係するけど、もうちょっとこう、焦点を絞っていったようなことができたらいいなと。まだまだモヤモヤして迷ってます。昨日もずっと今後の大学院の研究室だったりとか、こうペラペラペラとパソコンで調べてたりとかして。

大石：細貝さんは、一旦大学院で地球環境学を研究されて、こっちに入ってきてられて。そういうなんか自分が昔、修士のときやってたこととか、そのときとの地域との関わりとか、社会との関わりとかずいぶん変わられたと思うんですけど。

細貝：どうなんですかね、対馬に関しては。今後も関わりたいなって思ってるんですけど。物理的に遠くになったときに、今みたいな感じでたとえば神宮さんのところにお邪魔してとか、内山さんに会ってという頻度は絶対減るなかで、それこそどういう貢献ができるんだろうかっていうのは、今模索してる段階で。あと半年ないぐらいで離れるなかで。そう思うのも、なんかある意味おこがましいのかなって思ったりもするんですけど、それこそ、別に意思決定に関わりたいとか、そういうわけじゃないけど、何かできることがあったらやりたいっていう思いはすごくあって。もうそれをどういう形にするのがいいのかなっていうのと、自分が行く先で、そっちの生活とかが忙しくなるわけですよ、たぶん。ていうなかで、一体何ができるんだろうっていうのは、すごく考えていて。それはある意味研究フィールドと自分の関わり方っていうのに、もしかしたら似ている部分があるのかもしれないんですけども。うん。何がいいのかな、とっていて。

大石：対馬に来て活動するのに、地球環境学舎で学ばれたことって役立ちましたか？

細貝：そうですね。ただそのフィールドワーカーとしての視点とか、そういうのがすごく役立つなって思うことがたくさんありますね、むしろこっちに来て。街づくりとかの分野ですごく必要なんじゃないかなって思います。よく街づくりっていうと建築工学とか、そういうプランナー系の方がとても多いんですけど。それこそ文化人類学者とかが、入ってきたらもっと面白くなるんじゃないかなと思って見てます。日本の地域づくりにおいても。

大石：昔コンサルの会社にナンパされたことあったけど。修士のころ。断ったの覚えてる。

木村：コンサルも、もうたぶん、大体出してほしい結果が見えてるので。もうなんか、こういう結果を出してくれみたいなのに沿って、結構結果を出さなきゃいけないみたいです。

大石：すごく地域愛に溢れている、コンサルに勤めてた人がいて。飲み屋でいつも一緒だったんだけど。その人が、それこそ、その福井とか敦賀とかで仕事をしていて。お金が潤沢なわけですよ。でも、ものすごく。ただ愛がないと。発注者に。市について、街づくりについてのビジョンというものが、完全によそから来たものの当てはめでやろうとしていたりして、それに合わせなきゃいけない、最終的には。でも、その担当者とのやり取りで、それを変えていくっていうか。うん。そういうあたりに生きがいを感じている人で。ものすごい熱かったんですよ。

木村：ああ。いいですね。

大石：うん。面白かったけど。そのあいだで、でもストレスが溜まっておられた。

II-3. 研究者の地域還元：求められてなかったら押し売り

大石：僕も学部的时候は、かなり、京都のほうですけど、山村に入ってたことがあります。入ってたというか、それこそ炭焼き習ったりしてたんですけど。そのときある段階で、もうちょっと勉強して役に立つようになってから、もう1回帰って来い、みたいなことを言われたことがあって。うん。それで一旦、当事者として山村というか、コミュニティに入るっていうところはちょっと1回引いたんですよ。

桜庭：はい。

大石：うん。未だに何も返せてないという。ただ、たまに行って酒飲みには行ってるんだけど。そういうの

しかできてないね。うん。

木村：でもそれがお返しになってるかもしれない。

小林：でもそうやって大学の研究者が来て、還元しようと思って戻ってくると、この行政と地域の人と両方、コミュニケーションできるような存在だというふうに意識してるのか。

大石：そうじゃないよね。

細貝：うん。

大石：もうだから還元しようと思ってるのかえって言っちゃいけないんじゃないかっていう気が、僕は思っていて。なんかそういうことじゃないですね、期待されていることは。

木村：地域の方からですか？ううん。

大石：うん、単純に人間として、あのとき“遊びに”来てたやつがどうなったのかっていうことに関心があるっていうだけで。こっちもあのとき、あれの、お料理を教わった人とか、怒鳴られた人がどうなったかとか。なんかそういうパーソナルな部分での繋がりはずごくあるんだけど、研究したりとか、そういうアカデミックななんかを積んだからなにか返せるとか、還元できると思うこと自体が不自然な感じがする。

木村：還元っていうのは、実際にこういうふうにやったらいいよとか、そういうことを提案しに行くってことですか？

細貝：求められてなかったら押し売りですよ、それ。こっちは善意でお世話になったから返したいと思ったとしても。向こうが期待してる返し方って別に研究面での貢献とか、そういう面じゃなくて、たぶん大石さん一個人として一緒にご飯を食べるとか、なんか一緒にするっていうところを期待してるのに、なぜか行政に提案したがるのか。ていうところもまたズレてるのかなっていう。

大石：研究者として入っていった海外の調査地だと、もう行くたびになんか橋を作る計画を持ってきてほしいとか、学校がこうだとか病院はこうだとか、ある時期ずっとそういうこと言われ続けたけど、無理なわけですよ、それはやっぱり目的と違うし。そういうふうに考えていくと、あんまり。だから研究者だからとかいうの、ほとんど関係なくて。人間として付き合いたい人がいたら、付き合いは続くっていうことに過ぎない気がする。

小林：うん、確かに。

II-4. 表と裏というよりも、いろんな裏と表

大石：お話をする中で、積極的に農業政策の話とかをしてくださったお宅もありました。こっちから振ったわけじゃなかったよね？

小林：何も聞いてないです。

大石：向こうからお話しが始まったわけだから、やっぱり、そういうことを言いたいっていう気持ちがあったんだね。

小林：ていうか、たぶん、すごく共感できるものはあるけど、あまり周りの人とは、ああいう感じでは話せないから。

大石：先進的なことをされていると、たぶんある意味コミュニティのなかでは話しにくいこともあるから、外部者のわたしたちに語りたがるのかなって思ったんやけど。

木村：うん。孤立っていう言葉にも反応されていましたね。

小林：すごい反応してたよね。

桜庭：へえ。

小林：私が「孤立しないように」って言ったら、そこなんだって、って言って。

大石：後ろにいる奥さんの反応が、実は本音っていうか実態をかなり反映しているのではないかな。

木村：うん、かもしれない。ご主人がお話してるときでも、後ろで奥さんが「はあ？」とか言って違うよとか言ってて。ちょっと面白いな、と思って見てたんですけど。

大石：あれ、台所で話していましたが、細貝さんがさきほど「台所でご飯の手伝いしながら、話を聞いたほうが面白いってところもあるんだ」っていう話されてましたけど。ぼくら、男全部抜けて、女の人だけで座談会とかしてみても面白いかもしれないですね。そのほうが。

細貝：うん。たぶんお母さんたちに聞いたほうが、建前じゃないことを、どのおうちもきって言うってくれると思います。大抵。

木村：聞いてみたい。

桜庭：ありますね、それは確かに。

大石：ぼくの研究してる狩猟採集民のことを思い出しました。ハンターの間では、誰が獲物を獲ったかっていうのを隠すっていう社会も多いんですよ。

木村：そうなんですか？ふうん。

大石：上手い人ばかりが目立たないようにする。そういうことを、みんなが「平等的に付き合っているんだ」っていうように多くの研究者は解釈してきた。

小林：それは男のなかでプライドを守るため？実は女性とか全員知ってて。

大石：そういう部分もあるのかな。男どうしてそういう劇がやられてるだけっていう。女性研究者から聞くところによると、女性同士では、「あんたのこの旦那は昨日もボウズだったのよね・・・」みたいな会話が井戸端会議みたいな感じであるらしい。

小林：うん。全部見え見えなんだ。

木村：面白い。

大石：そう、だから表と裏っていうか。うん。

小林：表と裏っていうか、いろんな裏が。いろんな表が。

大石：ゲームが何重にも重なって起こっているっていうことだと思うんだよね。

小林：そのなかで、どこかの裏を取り上げても、研究者としてはなんか立場が難しいから。どういう表をどういうふうにすくい上げるか。

大石：うん。そういういろんなゲームが重なっている構造を、どういうふうに描けるかっていうか。全体としてどう動いているのか、バランスを取っているんだろうと思うけど。

II-5. 養蜂家と養蜂研究者のさっぱりした関係

大石：そうやって、うん。そうすると専門性を持って地域に関わるって、どういうことなんだろうとかっていうのは、よく思うんですけどね。

木村：確かにどういうことなんだろう。

大石：なんか、扇さんが、玉川大学の吉田忠晴さんについて、すごく友達みたいな感じで話をしてたけど。

木村：うん。でしたね。なんか別に研究者として、こういうことを教えてくれたとか、そういう感じでもなかったですよ。すごい、いい関係だなって思って聞いてました。

大石：ちょっといわゆる地域住民と他の研究者さんの関係とは、ちょっと違うのかな、という気もした。

木村：うん。たぶん関係性が、だからおじゃましたときに、例えば大石さんのことを「先生」って呼んでた方がおられましたけど、それと同じ感じで、たぶん他の、一応自分よりもある意味、「上の情報」を持っている人として捉えていてっていう感じだった気がしますけど。でもなんか、扇さんは本当に、結構対等というか、「研究者が持っている知識が絶対じゃない」っていう感じで、ちゃんとしゃべっていた気がしますね。

大石：むしろ、「研究者には俺が教えとるんや」っていう。

木村：そう、そんな感じですよ。

大石：うん。ニホンミツバチのことは知らへんのやと。みんなセイヨウミツバチのことは知っていてもニホンミツバチのことは知らへんのやっていうところを強調しておられた。

木村：それはすごく面白かったし、確かに聞いてすごいこっちも勉強になった。

桜庭：どのような関係性であれば対等で、反対にどのような関係性であれば対等でないのか、っていうことが気になりますねえ。僕自身、対馬で集落支援員の業務として聞き取り調査をしてきた中で、必ずしもみんながみんな、快くヒアリングを引き受けてくれたわけではなく……。僕らの場合は予算を持っている訳ではないので、僕らに話をする時間そのものを「無駄」と考える方もいて、「予算を持っていないやつに話しても仕方ない」と言われたこともありました。扇さんみたいにいい人ばかりじゃなくて、自分や、自分の組織に利益がないと、そもそも話すらもしてくれない人もおられます。うーん、そういった経験から、「対等な立場とはなんだろう？」ということを僕もずっと考えてきたので、この点については気になります。

細貝：そもそも対等な関係はあり得るのでしょうか？対等である必要性や必然性があるんだとすれば、どんなものなのでしょう？

小林：私も「対等な立場」には違和感を感じる。言いたいことはわかるのだけど。「研究者」と「社会」と言う以上立場は違う。そんな中で、お互いの立場をよく理解しあうことは大事なのですが。音楽の例えを利用してみると……。まず、協働するためにはお互いの楽器よく理解して、お互いの才能を楽しめないといけない。楽器一つ一つでは作り得ない音を創造する、その可能性をまず体感し、それを求めているといけない。桜庭くんが言ってた「地域づくり」という表現の曖昧さは「一緒に楽器を鳴らす」というくらい曖昧で、スマップ（SMAP）しか聞いたことない人とコルトレーン³²しか聞いたことない人が音を合わせても何も生まれないかもしれないし、モーツァルトしか聞いていない人にはどこかの農村の、楽譜に表記できないような民謡の音は分からないかもしれない。そんな人たちが共演するためには、幅広いリズムが感じれないといけない。そんな中で、私たちがお会いできた内山さんや扇さん、神宮さんはある意味いろんな音、リズムの楽しさを、共演の可能性を、体感されている人だと言えるかもしれないよね。大石さんがいう「対等な立場で」というのは、協働の楽しさを知っているもの同士だということが前提として必要なかもしれない。お互いが違う楽器の演奏者として対等な立場でないといけない。「見かけ上の協働」では意味がなく、1人では出来ないことをする、この人としかこのレベルの音は出せないという意味で、より良いセッションを作り出すための協働。扇さんと吉田先生のようなセッション。あれは研究者と地元の人だからできたのではなくて（トランペット専門とピアノ専門と一緒に楽器を鳴らしたからではなく）あの2人だからできた。そこが、瑞季が言う「研究対象」などの役割としての人ではなく「お互いを信頼しあっているの関係性の構築」なのだろうね。だから、全く違ったり、知らない楽器の音に興味がない人、合唱しても利益がないと思っている人とはセッションしましょうと言えないよね。私が言うセッションってこんな感じ（動画を見せる）³³。

だから私は何を言いたいのだろうか。研究者としては、研究者同士同様「お前とセッション組みたい！」と言われるような人間に自分の楽器を上手に弾けるようにならないといけない。そして相手の楽器と弾き手の能力にすごく興味を持っていけないといけないし、その全く違うメロディーに合わせるリズム感覚を持っていないといけない。瑞季の言う「サポート」だったら、その能力をサポー

32 John Coltrane (1926-1967)。アメリカ合衆国のモダンジャズのサクソフーン奏者。

33 小林が見せたセッションのイメージの動画。"Herbie Hancock's "Imagine", featuring Pink, Seal, India Arie". URL: <https://youtu.be/mVAQl7qq-aI> (2016年1月28日アクセス)

トし得るくらい自分もその能力を理解できる人でないといけないよね。

大石：音楽の喩えはわかりやすいね。幅広いリズムを感じられて、協働する楽しさがわかるには何が必要なんだろう？セッションを愉しむためには、かならずしも対等でなくてもよいのかな？ぼくは前に教えてもらった Bobby McFerrin のコンサートのイメージもいいなと思う（動画を見せる）³⁴。

小林：これはまた違うイメージですよ。良い指揮者、リーダー的存在がいることから生まれる協働。対馬の話とは離れちゃうけど、ここですごいのは言葉を使わず Bobby が指導できているところで。ここではリーダーの能力とその指示に従おうという大衆の意志が重要なのではないのでしょうか。

桜庭：「協働する楽しさ」こそが、協働を目的としないための「ミソ」なのかなあ。とても抽象的ですが。

大石：でも、人と人の相性の問題と言うことになってくると、遊びのようなもので、協働は起こるべきときに、自然発生的に起こるとしか言いようがなくなってくる気もする。研究の世界では、自分の楽器を弾けるようになってはじめて、共同研究（オーケストラ）ができるようになる、という意見と、いやいや、そもそも真の学際のは困難で、むしろ早い時期からいろんな分野の視点を取りこんで個人が自分の世界の中で統合していくしかないんじゃないと言う意見があるように思う。

小林：相性はとても大事な要素ですが、自然発生的な協働以外のものもありますよね。むしろそれ以外のものの方が多い。学際的な交流と超学際的なものとの違いの話とすると、音楽にクラシックだけないのと同じように、いろいろな音とリズムがあって、ジャンルを超えた共演が超学際的だとすると、超学際的コミュニケーションは「研究」だけにとどまらない目的を共有する必要性がまずあると思う。

桜庭：楽器（自身の専門分野）を捨てる、というよりも、とりあえず一度置いておいて、他の楽器（専門外の分野）を演奏してみる、はたまた自身の「音楽」という概念を超越したものに触れてみる、その中で自身の楽器を活かすことができないか模索することが超学際研究になるのでしょうかね？そもそも、マルチディシプリナリーって言っても、研究者が勝手にマルチディシプリナリーと考えているだけで、地域の方が普段から分野を分けて事柄を考えているわけではないので、真にインターディシプリナリーな地域研究を共同で行うことはとても難しい気がする。情報の分類の仕方が違うもの同士が一つの分野について話をする中で、重ならない部分が出てくる、研究者が欲しい情報が全て出てこないのは当然だと思います。だからこそ、研究のために必要だと思われる時間「以外」の時間を地域に暮らす人たちと共に過ごすことで、こぼれてしまった情報を拾い上げていく、そうすることで結果的にインディシプリナリーな研究になっていくのだと、僕自身は考えてます。

II-6. 小さな生業と経済の自立性

大石：うん。あと、扇さんは、「養蜂は趣味なんや」っていう形で、非常に強調してた。

木村：言ってらっしゃいましたね。

大石：商売の養蜂をしようっていう人がいたら、「もう話せえへん」とまで。まあジョークだと思うけど。ある小さな生業を維持していくのに、あえてそれをメインの稼ぎにしてみたくないところがある自立性を保つためのひとつのポイントなのかしらっていう気が、ちょっとしたんですよね。

木村：神宮さんは、むしろメインのお仕事として有機農業をやろうとされていました。

細貝：そういう意味ではお2人に会えたのはすごく面白かったのかなって。

木村：最初におじゃました内山さんは、ご自分が食べるためになって感じてましたね。普通に。

小林：何よりも楽しんでたよね。

木村：楽しんでやっておられましたよね。いろんな種類の野菜育てるのに。

34 大石が共有した動画。"Bobby McFerrin: Ave Maria" URL: <https://www.youtube.com/watch?v=14LcypXmb74> (2016 年 1 月 28 日アクセス)



図 15 ツマアカスズメバチを捕獲・駆除するための「ツマアカ・トラップ」

小林：うん。こうじゃないといけないっていうのが、ほとんどなかったからね。

木村：面白いと思って。うん。楽しいって言ってやってた。

小林：神宮さんは、田んぼの生物多様性、つまり「おたまじゃくしがいて」っていう、すごい外から来たような考え方を、内部化しようとしてらっしゃった。

大石：うん、そういう考え方は、ちょっと借りてきた猫みたいな感じはあったね。

小林：でもそういう話し方なだけで。

大石：うん、やっぱり圍場っていうか、畑とかハチの巣見ながらの話はすごく面白かったし、すごく自然な感じがした。

木村：うん。ハチの巣を見てるときが1番。

小林：そう。ツマアカスズメバチをさ、こうやって見て追い払っていた。あの手捌きがすごく速かった。

木村：あの罠（ツマアカ・トラップ）とかちゃんと設置して。ハチの巣の管理っていうか、もう見回りもちゃんと毎日、1日1回とか？

細貝：人によりますね。

木村：やってるんですね。

細貝：あんまり行くとハチが嫌がるっていう人もいるし。でも見ないと巣虫っていうのが入っちゃうと、すぐそれを取らないと、もう。群が弱いとやられちゃったりするので。

木村：そうですね、可愛いって言ってたから。落ち着くって言ってたから。

大石：ハチが好きだっていうところで、吉田さんも扇さんも神宮さんも、たぶん繋がってる。

木村：そうですね、扇さんも言うておられましたよね。まずは、好きじゃないとできないみたいな。できないっていうか、好きじゃなかったらハチに嫌われるって言ってた。

II-7. ハチを愛する生き方

大石：いやあ。扇さんはやっぱりすごい自由人って感じでよかったね、ほんとに面白かった。一旦島を出られて、いろんな職業を経験されていたって言うたもんね。初めね。

小林：自衛隊にもいたみたいだし。いろんなヒエラルキーの関わりを経験してきたから、あえて学者を立てる必要もなくていう経験があるんだろうね。

大石：ていうか、そもそも養蜂に関して誰に依存するっていう必要性が彼にはまったくなかったし、ってことじゃないの？

小林：でもこれだけいろんな人たちに教えて、講義をしてっていうのは、かなりきっかけがあつてのことだと思うけどね。

木村：でもあの平成 25 年にハチが減っちゃったのが、結構ご自分も責任あるみたいなことを言ってましたよね。

小林：うんうん。趣味的養蜂を島中に広めてしまつて。

木村：本当にハチのことをわかつて、みんな養蜂をやってないから。そこまで教えられなかったっていうふうに、たぶん考えられてるのかなと思って。ハチがもし本当に好きだったとしたら、考えちゃうかもしれない。

大石：うん。とにかくハチが好きだから、他人のハチをもらう、群れをもらうとかって全然興味ないって言うてらしたもんね。ハチは子供みたいなものだから、って。

小林：家族みたいな。うん。だけど飼い主の行動で、ハチが生きるか死ぬかっていうコントロールっていうか、そこまでできたりもするわけなんだね。そこまでコントロールがあるのって知らなかった。

木村：そうですね。

大石：結構、思ったよりかは、想像してたよりも、ハチが人間にけっこう依存してるっていうか。そういうところあるんだなと。

桜庭：ちゃんと巣を手入れしてやらないとだめよっていう話ですよ。

木村：そう。僕が京都でやっているのは、本当に放置なんで³⁵。

桜庭：へえ。

木村：やり方がだめだなと思って、ちょっと勉強になりました。

桜庭：養蜂ですか？へえ。

大石：いや、放置でも、まったくだめじゃないんだよとは言うてたよね。ただ・・・。

木村：言うてましたね、でもなんか。そういう関係性を築けてないのかもと思って、ちょっと改めて考え直さなきゃみたいな。

II-8. 環境問題がそもそも虹色

大石：よそからぱっと来たばくとか舞さんがおもしろいと思ったところと、対馬に住んでいる細貝さんや桜庭さんがふむふむと思ったところは違うのかな、どうなんだろう、と思ったのですがどうでしょう？

細貝：はい。おもしろいと思われたところは研究者の話のあたりですか？

大石：感銘を受けたのは、「ハチのことを知らない蜂飼いが増えたのはぼくのせいや」って言い切られたところですかね。

細貝：そうですねー。好むと好まざると養蜂を推進したのは扇さんという自負を持ってらっしゃるように感

35 学生であり、なかなか現地に行くことはできないという意味。熊などがくるためご協力をいただいている集落の方に日常的な見回りなどをしてもらい、当事者らは学業の合間（1-2 週間に 1 回）に様子を見に行き、掃除や補修、台風対策など、ちょっとした世話を続けた。

じています。愛していращやるからこそその負い目もあるのかな。

大石：養蜂が伝統的にあったものの継続というわけではなくて、外部の研究者から刺激されて、扇さんと言う個人との出会いがあって、ブレイクが起こったというのも意外でした。

細貝：もちろん継続されていた方もいたそうですよ。ただ、講習会のような形で広まったのは扇さんが講師として活躍されてからでしょうね。

大石：重箱式のやり方の発明については自負を語っておられました。頼まれて、という話だったと思うけれど、普及に熱心になられたモチベーションについて伺いするところには至りませんでした。扇さんとは、いろいろな話が養蜂を中心に出来たと思うんですが、細貝さんの的には発見ありました？

な一んも知らない僕らには新鮮なことばかりでしたけど。

細貝：発見ですね。専門用語をあまり使わずに自分の言葉で話されている点や、研究者と話すのに変にへりくだらないところが印象的でした。あと、「補助金が多すぎて歩けない」といった表現は、いままでのお話の中ではでてこなかったのもおもしろかったです。

大石：補助金に「けつつまづいて・・・」のくだりですね。

細貝：そうです！

大石：あっちこちで補助金の話がでてきました。

細貝：扇さんの感覚が興味深いですね。自分がいま行政的なところにいるからそう思うのかもしれません。

小林：大石さんは私と瑞季が車の中で話して虹の色にたとえた通訳の表現の話とか、会話をすることで外の人と話すときと内の人と話すときの内容が違おうのだろうということをもっと膨らませられないかと言ってましたよね。

大石：うん。あれは面白かった。もっと聞きたいです。

小林：私も修士課程の研究の時、すでにインタビューされている農家と話す機会が多くあって、話されている内容や表現方法が以前記録されているものと全く同じで、面白くない。ストーリーができています。それは悪くないし、私も同じような表現方法をとるのですが、フィールド調査の手法ではそのニュアンスってどう判断するのでしょうかね。

大石：一見、同じように見えても、相手がどんどんすべり出すときがあるでしょ。そういうところに注目するね。ぼくは。

小林：すべり出すとは、たくさん話し出す時ですか？

大石：たぶん、話慣れてる人には formula（公式）がある。このネタではこれって定食みたいな。でもね、インタラクションしてるうちに、そこからずれて夢中になっちゃうのよ。本人がつくったストーリーから飛躍がおこるとき。

細貝：研究者ってこんなこといったら喜ぶんでしょっていう形ですよ。

小林：そう。

細貝：本人と研究者が作ったストーリー。

大石：研究者に限らずね、記者とか、よそ者相手の言説の「定食」。よい聞き取りなら、そこから狂いが出てくる。そいで、ジャズになる。

細貝：地元の人が、作られた言説の中のストーリーテラーになっているんですよね。紋切り型にはまる。

小林：ジャズはかなり洗礼されておりますよ。

大石：先が読めない会話こそが面白い。

細貝：いかにセッションを作り出せるか？

大石：洗練され切る手前がうまいとちゃうの？

小林：そのうまい、いかにもアドリブ的なところをどれくらい出せるかの練習をするんですよ。会話もそうですよね。

大石：うん。

小林：環境問題も結構作られた narrative（語り）が多いから、いかにそこから抜け出せるか。さて、対馬に戻るとどうだ。

細貝：それが「色」で考えてみるところにつながりそう。虹色と 3 色。3 色で作られる枠組み。

小林：ですな。

大石：それがさらに一色になってしまう枠組み。

小林：環境問題がそもそも虹色は 7 色だ、という話。

細貝：その根元を考えないで、こうだよーって話で予定調和で進んでいく。研究でなくても、前提がどんなことなのか見つめる必要があります。

小林：文化によっては虹はもっと多いと見る人たちもいる。でもそれは研究者なんかは見えなかったりする。

大石：逆もあるかもよ。研究者にしか見えない虹が、社会では単色ということも。

細貝：どちらも絶対ではない。

小林：ただお互いに虹の話をしている以上、その確認があまり丁寧になされないところが問題。大石さん、そこ Toolbox のワークショップ³⁶でも問いでありましたよね。現地の人はどう言おうとも、認識が間違っていることはある、と。現地の人たちが言っていることが絶対か。そのニュアンスの通訳の大切さ。

大石：そやったねえ。Transdisciplinarity（学際的事であること）の可能性 / 不可能性に関わるポイントやね。これって、lost in translation（翻訳で落ちてしまうモノ／コト）と言ってしまってよいのかな？世界を見ている言語や身振りの問題なのか、そういう次元ではないのか。

小林：その通訳の役割が島と外部をつなぐ立場の人に、期待されているとかって話だったよね。

大石：最後に訪問したお宅でのご主人と奥様を交えたやりとり、ほとんど文字にできてないのだけど、面白かったね。奥様のするどいツッコミとか。定食を定食じゃなくしてはった。

桜庭：ムズカシイハナシだな、、、これって要するに、同じ言葉であっても使う人によってニュアンスが違ったり、同じ経験であっても人によって（例えば国籍が違うとか、住んでいる文化圏が違うとか）表現の仕方が違う、ってことですよ？

小林：うん、そう。

木村：これって哲学の分野では記号論とかそのあたりで議論されている内容と近い話ですかね？

細貝：モノクロと虹色の狭間で翻訳を行えるとしたら、どのようなことができるのか、それは言葉だけでどうにかできる問題なのでしょうか。個人個人がもっている、個別具体的な経験に基づく言葉の使い方が存在する中で、どうやってお互いの言葉の意味をすりあわせていくのか。またそれが集団になったときにどうしたらよいのか、興味は尽きません。

桜庭：僕にとって一番身近な例である対馬での経験をもとにこのことを考えると、方言がその一例なのかな、と思うのです。日本国内であれば、「日本語」という共通言語があり、お互いの認識の差異について対話することで明確にしていけると思うのです。更に話し合うだけでなく、体験や経験を擬似的に再現することでより明確にできるのではないかなあ、ということを感じます。

36 2015 年 11 月 2-3 日にかけて、総合地球環境学研究所で開催された、「地球研研究開発ワークショップ：学際研究に対するツールボックス・アプローチ」。ミシガン州立大学から招聘された講師をファシリテーターとして、研究者コミュニティ内外の多様な価値観をもつ利害関係者を含んだ学際研究を進めるために、いかに参加者相互が互いの違いを理解するためのツールを学んだ。ツールボックス・アプローチの考え方や手法、応用事例については、例えば Toolbox project のホームページ(英文)に詳しい。URL: <http://toolbox-project.org/> (2016 年 1 月 29 日アクセス)

II-9. バランスの崩れ

細貝：奥さんは媚びていないんですよね。よそののに対して。

小林：そこのバランスが transdisciplinary (学際的) な会話には不可欠ですよね。disagreement (合意できないこと／合意できなさ) の大切さ。扇さんのところも内と外とのバランスが崩れるところで、大きな問題が可視化されてるところあったし。

大石：それ (disagreement) をどちらか／どちらかが認識できてないと、始まらないだろうね。内と外って、島のって意味？

小林：そう思って言いましたが、内内もですね。

大石：バランスが崩れるところって言ってたけど、どのあたりかしら？たとえば。

小林：たとえば。養蜂の広まりと、養蜂家の過剰な増加。

大石：ふむ。さっき瑞季さんとも話してたのだけど、扇さんが力を込めて「おれのせいやっ」って言っていたところにぼくも「ん！」と感じた。

細貝：バランスの崩壊。おもしろい視点ですね。

大石：瑞季さんからは、対馬では、けっきょく柔軟な翻訳というのは、島に住んだからと言ってできるわけでもなく、難しいのではと言うことをお聞きしたように思います。

細貝：そうですね。なにを目指しての協働なのか、どのように役割分担をするのか、自分と地域の関わり方を問われているように思います。

大石：じゃあ、結局虹色とモノクロはどうつるんだらいいのか、そんなあたりを次回、お聞きできたらなと思います。ま、さっきの会話だとそもそもお互いがお互いをモノクロだと思っていたりする可能性もあるわけで。

小林：どんな通訳でもそうですが、通訳が出来るというのと、伝わっているかいないかの判断をするというのは別だとも言えます。

細貝：そうしたらそれが問題提起のひとつになりそうですね。

大石：研究者と地元、地元のなか、それぞれの間でのコミュニケーションの境界と接続と言った感じで全体の整理をし直してみたいと思います。

細貝：はい。楽しみにしています。

II-10. 身体性の地球環境学

大石：舞さん、「通訳」と「伝わる」の位相の違いについてちょっと詳しく教えてもらえたら嬉しいです。あと、「バランスの崩壊」のところ。

小林：それは身体の柔らかさだと思います！

大石：Ohlala！

小林：そうですね。またお話ししましょう。

大石：なにとなにのバランスなのか。興味深いです。

小林：私も良く分かっておりませんが。考えてみましょう。

大石：さしあたり、送った原稿の中で (なくてもよいけど)、崩れを感じたところをこことここって教えてもらえたら助かります。

大石：そう言えば、きょうのヨガ³⁷、バランス悪かったわ。俺。

小林：そこで見えてきたものありませんでした？

37「地球研ヨガ倶楽部」での活動のこと。総合地球環境学研究所には、園芸、フットサルなどいくつかの課外活動を行なうグループがある。

大石：頭で物事解決しようとする、身体が堅くなる。当たり前ですが、それを再認識。

小林：それ結構環境問題の核でないでしょうか。

大石：でも、レッスンの最後にマントラ唱えたら気が抜けてよかった。ほんま、おれアホやわ。

小林：アホが大事だと思います。でも気が抜けるがアホですか？

大石：ううん。そこちゃって、ヨガしないとそういう自分に気づかない俺があほって意味。身体に依存しないと自分がわからない。

小林：それって当たり前でないですか？でもそこがわからなくなるからヨガをするのがひとつの大切な意味なのでは？

大石：うん。かも。

小林：それはやっぱ大事なアホですよ。

細貝：身体感覚を取り戻してくださいねー！

小林：私も論文作業でとても感覚なくしてる感じする。

大石：長時間ありがとうございました。

対話のまとめと考察2：超学際的なコミュニケーションとは？

扇氏との対話を踏まえた振り返りでは、研究者と社会の協働に関わるコミュニケーションの問題に主要な関心が向けられた。意識的な社会とのかかわりを重視する超学際研究では、関わる者の間で、そもそも誰にとって何が問題なのか、何のための協働なのか、についてのとりわけ丁寧な確認が必要となる。

まず、研究者が外部から地域社会に入っていく際に、その社会が研究者とどのような関わりを持ってきたか、その結果研究者をどのような存在としてみる文化があるのかを理解する必要があるが、往々にして研究者は、自分がどのように見なされうるかについて、無自覚になりがちである点を取り上げられた。

例えば、対馬に限らず、日本では補助金行政の中に学術用語が流通し、組み込まれていて、研究者や学者には補助金獲得のための助言者や補助金のレフェリーとしての役割が期待されている。座談会で扇氏が述べたように、「補助金にけっつまづいて動けない」という言葉は、補助金が地域住民が自ら問題解決の主体となることを助けるよりも、むしろその可能性を打ち消しかねないよう実態を示唆している。

研究者は、そのような認識が社会の側にあることを十分に踏まえたうえで、どのような関係性づくりが望ましいか検討する必要があるだろう。このことは、とくに、既存の権力関係（御用学者—行政—地域住民）という枠組みに単純に回収されない、より対等な関係を作ってゆくうえでは研究の様々な段階で重要となるだろう。

次に、地域住民と専門家や研究者とでは、自然や社会の見え方、感じ方が違うということについて調査や実務の中での経験が紹介され、両者の間の翻訳はどうしたら可能なのか、通訳できるような言語の問題なのか、という問題が取り上げられた。地域住民がホーリスティックな知覚経験として生活の中で感じ取っているもの—座談会では7色の虹色という表現が出てきた—を、研究者や専門家が専門的な言葉によって抽象化してしまう過程で起こる単純化（simplification）³⁸。そのプロセスによって、地域住民が大事としている感覚質や身体性が研究の成果物から意識的／無意識的に漏れ落ち、捨象されてしまう。それは7色が3色に、さらにモノトーンに射影されてしまうことに例えられ、そのことこそが問題なのではないかという指摘があった。逆に研究者や専門家が研究対象について持っているイメージの豊かさが地域住民には伝わっていないという可能性も指摘された。このことは、学際研究を行なう異分野の研究者どうしても十分に起こりうること

38 単純化（simplification）がもたらす悪循環については、例えば、保全における地域住民の実践の単純化をあつかった笹岡（2012）に詳しい。笹岡正俊．(2012). 社会的に公正な生物資源保全に求められる「深い地域理解」：「保全におけるシンプリフィケーション」に関する一考察．林業経済，65(2): 1-18.

である。

一方で、(異分野の研究者の間で) 学際的であることと、(学術コミュニティを超えた多様な主体の間で) 超学際的であることは次元が異なることなのではないかと気づかせられたのは、30 年近くの長期間にわたり交流を持ち続けた扇米稔氏と故・吉田忠晴博士の関わりのある方であった。扇氏の語りからは、両者がニホンミツバチそのものへの“愛”のようなもの、そしてニホンミツバチと環境の関わりへの関心を共通項に、対等なつきあいを行ない、養蜂技術の確立やハチに対する病虫害対策における協働が実現されていたことが伺えた。吉田博士は、ニホンミツバチの生態を専門にされており、とりたてて研究の中で学際性を重視していたとは思われない。ここでは、ハチへの関心に基づく信頼が関係の基礎となっていて、研究者が学際的であることが超学際的であることの必要条件となっているというわけではまったくないのである。

ここまで述べてきたようなコミュニケーションをめぐる問題を踏まえれば、社会との協働は予定調和的に進められるべきではない、という答えに行き着く。予定調和で進められる“協働”は、研究者／専門家と地域社会、あるいは地域社会内部での“バランスの崩れ”を覆い隠してしまい、それによって、可視化されるべき重要な問題を見落としかねないのである。

何らかの権威による採択／決定時点で、得られるべき事業成果の出口について設定を求められるプロジェクト研究や環境政策の実施プロセスでは、このことには特に注意が払われるべきである。「研究者と社会が協働する」というときに、協働すること自体が目的になってしまわないように、相互がどのような利害関係や価値観に立って、何を前提として関わりを持ち、継続しうるのかを可能な限り理解し合うこと。さらに、理解しあえないことへの関心を含め、協働相手の状況への感興³⁹を失わないこと。研究実践のあらゆる段階で不断にこれを行う努力をなすこと、なせるような条件を整える工夫をすること、がある研究が超学際的であることの本質なのではないだろうか。

■ 謝辞

扇米稔氏には貴重な時間を割いて座談会にご参加をいただいたのみならず、暖かいもてなしをいただきました。内山美津子氏、神宮正芳氏、阿比留松栄氏には突然の訪問にも関わらず、対馬の豊かさについてご教示いただきました。細貝瑞季氏には、対馬での滞在全般についてお世話になりました。ここに記して感謝いたします。対馬市には、島おこし協働隊員の細貝瑞季氏と集落支援員の桜庭俊太氏の座談会への参加をご許可いただきました。浅野悟史博士(総合地球環境学研究所)には、ニホンミツバチとツマアカスズメバチの生態写真の提供をいただいた。東口涼氏(京都大学大学院農学研究科)には、草稿へのコメントをいただいた。

現地訪問には、科学研究費補助金若手 (B)「カメルーン東南部狩猟採集社会における遅延報酬の許容と萌芽的な社会階層化 (代表: 大石高典、課題番号: 26870297)」、総合地球環境学研究所プレ・リサーチプロジェクト「持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築—食農体系の転換にむけて (代表: MCGREEVY, Steven)」、科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「社会的弱者層が駆動する新たな在地コミュニティビジネスの実証的展開と成立要件の解明 (代表: 田中樹、課題番号: 26570016)」による支援を受けた。

39 感興とは、主体的な関心、興味を持つことである。1960 年代から公害問題に関わってきた石田紀郎は、大学学部の新入生に向けたメッセージの中で、課題に関わる研究者の社会や学界の中での位置づけが公害問題から環境問題へというパラダイム変化の中でどのように変わってきたかを自身の体験に即して述べつつ、グローバルな環境問題に取り組むうえで、具体的な地域に関心を持つことの重要性を述べるのに、「感興」という言葉をもちいている (石田、1996)。石田紀郎. (1996). 「教官エッセイ: 地球環境は地域感興から」『京都大学を知る本 京大サクセスブック 1997』京都大学新聞社編、六甲出版。pp. 204-205.

